福童町遺跡９

－福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第265集

２０１２

小郡市教育委員会

福童町遺跡９

－福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告－

小郡市文化財調査報告書第265集

２０１２

小郡市教育委員会

＜序　文＞

小郡市は、北部における宅地開発や北東・中南部における工業団地の開発が相次いで行われ、現在福岡・久留米両市のベットタウンとして日々発展を続けています。これに伴い、交通網の整備も着々と進行しつつあります。

今回ここに報告いたします「福童町遺跡9」は、小郡・西福童3081・3086号線整備事業に先だって、小郡市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。遺跡は、三国丘陵から伸びる洪積台地の縁辺部に築かれており、近年盛んに開発が行われている西福童区に位置します。西福童区は、古くは縄文時代から今回報告いたします近現代まで連綿と人々の生活の痕跡が見つかる地域です。今回得られた成果が、小郡の歴史を復元する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた周辺住民の皆様、現地作業にあたった地元作業員の皆様など、発掘調査を進める際にお世話になった多くの方々に感謝を申し上げ、序文といたします。

平成24年3月 31 日

小郡市教育委員会

教育長　清武 輝

＜例　言＞

1、本書は小郡・西福童 3081・3086 号線道路整備事業に伴い、小郡市教育委員会が平成 22 年度に小郡市福童地内において発掘調査を行った福童町遺跡9の埋蔵文化財発掘調査の記録である。調査は小郡市教育委員会文化財課が小郡市まちづくり推進課から委託を受けて実施した。

2、遺構の実測・写真撮影は西江幸子が実施し、空中写真は（有）空中写真企画に委託した。

3、遺物の復元・実測・製図には、西江のほかに衛藤知嘉子、佐々木智子、原野照子、井上千代美、長野智恵子、柳美保幸、宮崎美穂子ら諸氏に多大なる協力を得た。また、遺物の写真撮影は（有）文化財写真工房に委託した。

4、出土人骨の分析は、国立大学法人九州大学大学院比較社会文化研究院に委託し、第5章の報告分を執筆いただいた。

5、遺構図中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系（世界測地系）に則している。

6、本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T．P.）を基準としている。

7、土器実測図のうち中軸線の左右に白抜きのあるものは、口径の残存が1／6以下のもの、あるいは、口径の推定が困難なものである。

8、遺物・実測図・写真は小郡市埋蔵文化財調査センターにて管理・保管している。

9、本書の執筆・編集は西江が担当した。

本文目次

第1章　調査の経過と組織…… 1
1．調査の経緯
2．調査の経過
3．調査の体制
第2章　位置と環境…… 2
第3章　遺跡の概要…… 4
第4章　遺構と遺物…… 4
1．溝
2．土坑
3．墓壙
4．ピット
第5章　福童町遺跡9出土人骨について…… 27
第6章　まとめ…… 41
1．福童町遺跡9の遺構の時期とその変遷について
2．小郡市域における近現代墓の傾向
福童町遺跡9　出土遺物観察表…… 43

挿図目次

第1図　福童町遺跡9周辺遺跡分布図（S＝1／25,000）…… 2
第2図　福童町遺跡9調査地位置図（S＝1／2,500）…… 3
第3図　福童町遺跡9全体図（S＝1／100）…… 5･6
第4図　1・2号溝実測図（S＝1／40）…… 14
第5図　3・4号溝、1号土坑、32号墓実測図（S＝1／40）…… 15
第6図　1・2・3・4・20・21・22号墓実測図（S＝1／40）…… 16
第7図　5・6・7・8号墓実測図（7号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）…… 17
第8図　9・10・11・12号墓実測図（9・11号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）…… 18
第9図　13・14・15・16・31号墓実測図（15・16・31号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）…… 19
第10図　17・18・23・26号墓実測図（17・18号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）…… 20
第11図　19・24・25・27・28号墓実測図（19・24・25号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）…… 21
第12図　29・30・32号墓実測図（S＝1／40）…… 22
第13図　1号溝、1号土坑出土遺物実測図（S＝1／4）…… 23
第14図　1・3・6・9・11号墓出土遺物実測図（16・17・20・22：S＝1/1、21・23：S＝1/8、その他：S＝1/4）… 24
第15図　15・16・17号墓出土遺物実測図（29：S＝1/1、30：S＝1/2、26・27・31：S＝1/8、その他：S＝1/4）… 25
第16図　18・19・25・27号墓出土遺物実測図（32・36・37：S＝1/8、その他：S＝1/4）……26
第17図　横隈十三塚遺跡（S＝1／400）…… 42
第18図　三沢北中尾遺跡5地点（S＝1／800）…… 42

表目次

福童町遺跡9　出土遺物観察表…… 43

図版目次

図版1　①北西調査区全景（真上から）
②北東調査区全景（真上から）
図版2　①北東調査区墓域全景（真上から）
②墓域西側全景（北側から）
③北西調査区北壁土層断面（東側から）
④1号溝土層断面（南側から）
⑤1号溝・2号溝完掘全景（真上から）
⑥1号溝遺物出土状況（南側から）
⑦3号溝完掘全景（南側から）
図版3　①3号溝土層断面（南側から）
②4号溝土層断面（北側から）
③4号溝遺物出土状況（北側から）
④1号土坑遺物出土状況（南側から）
⑤1号墓完掘全景（南側から）
⑥2号墓完掘全景（南側から）
⑦3号墓完掘全景（西側から）
図版4　①4号墓土層断面（北側から）
②5号墓完掘全景（南側から）
③6号墓完掘全景（北側から）
④7号墓掘り込み検出状況（北側から）
⑤8号墓土層断面・完掘全景（西側から）
⑥9号墓甕検出状況（南側から）
⑦9号墓人骨出土状況（南側から）
図版5　① 10 号墓完掘全景（東側から）
② 11 号墓甕検出状況（東側から）
③ 11 号墓人骨出土状況（西側から）
④ 12 号墓完掘全景（北側から）
⑤ 13 号墓完掘全景（西側から）
⑥ 14 号墓完掘全景（北側から）
図版6　① 15 号墓完掘全景・16 号墓甕検出状況（東側から）
② 15 号墓人骨出土状況（北側から）
③ 16 号墓甕検出状況（西側から）
④ 16 号墓人骨出土状況（東側から）
⑤ 17 号墓甕検出状況（北側から）
⑥ 17 号墓人骨出土状況（東側から）
図版7　① 18 号墓甕検出状況（南側から）
② 18 号墓人骨出土状況（南側から）
③ 19 号墓甕検出状況（北側から）
④ 25 号墓完掘全景（西側から）
⑤ 27 号墓完掘全景（東側から）
⑥ 29 号墓完掘全景（北側から）
⑦ 30 号墓完掘全景（北側から）
図版8　1号溝、1号土坑、1・3・6・9・11・15 号墓出土遺物
図版9　9・11・16・17・18・19・25・27 号墓出土遺物

第1章　調査の経過と組織

1．調査の経緯

福童町遺跡9の発掘調査は、小郡市福童字町 353 － 2、356 － 4、359 － 4、362 － 12、字東内畑 495 － 14、509 － 3、509 － 4 が「小郡・西福童 3081・3086 号線」道路改良工事の対象地となり、平成 22 年7月 12 日小郡市役所まちづくり推進課より埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号 0038）が提出されたことに始まる。市教委では、これを受けて平成 22 年8月9日に申請地の試掘調査を行った結果、地表下約 45 ㎝～ 80 ㎝の深さで遺構が確認されたため、開発に先立って埋蔵文化財に関する協議を行った。結果、平成 22・23 年度事業として調査及び発掘調査報告書を刊行する事で同意を得た。調査費用に関しては、小郡市役所まちづくり推進課より小郡市教育委員会文化財課が予算の執行委任を受けた。

2．調査の経過

発掘調査は平成 22 年 11 月4日から同年 12 月 28 日にかけて実施した。調査の主な経過は以下のとおりである。

11 月 4日　北西側調査区と南西側調査区において重機による表土剥ぎ開始。
　　調査対象地の仮囲い設置。
11 月 5日　発掘道具搬入。
11 月 8日　発掘作業員を投入し、北西側調査区の遺構掘削開始。
11 月 12 日 北西側調査区と南西側調査区の全景写真撮影。
11 月 15 日 北西側調査区において重機による埋め戻し。北東側調査区において重機による表土剥ぎ。
11 月 16 日 南西側調査区において重機による埋め戻し。南東側調査区において重機による表土剥ぎ。
11 月 17 日 発掘作業員を投入し、北東側調査区の遺構掘削開始。
12 月 10 日 北東側調査区と南東側調査区の全景写真撮影。
12 月 24 日 遺構掘り下げ、遺構実測終了。
12 月 27 日 北東側調査区と南東側調査区において重機による埋め戻し。（～ 28 日）
12 月 28 日 調査完了、まちづくり推進課担当者立ち会いのもと現地引き渡し。

3．調査の体制

〔小郡市役所都市建設部〕

都市建設部	部 長	池田　清巳（平成 22 年度）、平田　廣明（平成 23 年度）
まちづくり推進課	課 長	平田　廣明（平成 22 年度）、市原　重夫（平成 23 年度）
施設・公園係	係 長	弥永　健俊
		川野　哲司

〔小郡市教育委員会〕

	教育長	清武　輝
教育部	部 長	河原　寿一郎（平成 22 年度）、吉浦　大志博（平成 23 年度）
文化財課	課 長	田篭　千代太（平成 22 年度）、片岡　宏二（平成 23 年度）
	係 長	片岡　宏二（平成 22 年度）、柏原　孝俊（平成 23 年度）
	技 師	西江　幸子

〔発掘作業従事者〕

伊東みさ子、小川高征、古賀憲昭、田中賢二、森下弥寿治（以上小郡市在住）（敬称略）

第２章　位置と環境

小郡市は、中央部を南北に宝満川が流れ、北西部に通称三国丘陵、北東部に花立山（標高 130.6 m）から伸びる丘陵があり、南側に行くに従って緩やかに下る平坦な台地へ移行し、筑後平野へと連なる。

福童町遺跡9は、小郡市の中心を南流する宝満川と西側を流れる秋光川とに挟まれた三国丘陵から伸びる洪積台地の縁辺部に所在し、弥生時代の銅戈が出土した寺福童地区の中位段丘とは、遺跡の北側から東側にかけて広がる秋光川の旧河道跡により分離されている。この縁辺部より南側の宝満川西岸では、現在まで遺跡の所在は確認されていない。

福童町遺跡は、平成 16 年度以降8回の調査が実施されている。第1次では古墳時代後期の集落跡が（2：市報告 203 集）、第3次・第7次・第8次では第1次で検出した古墳時代後期の集落の居住区域を区画すると考えられる溝、中世の建物群や区画溝、近世の畠等が（3：市報告 225 集・237 集・240 集）、第2次・第4次・第6次では弥生時代から近世にかけて土地の区画として用いたと考えられる溝が検出される等（4：市報告 207 集・226 集）、縄文時代以降、連綿と遺構・遺物が検出されている。以下では、福童区を中心に本遺跡の周辺地域に分布する遺跡等の歴史的環境の概要を示す。

福童区において、人々の活動が最初に確認されたのは縄文時代後期であるが、土器の欠片が数点出土したのみである。弥生時代になると、福童町遺跡4において中期末の溝が確認されているものの、福童町遺跡8・9等その他の遺跡では中期の土器片が散見されるのみであり、いまだ人々の具体的な活動の様相は不明である。一方で、福童区の北東側に位置する寺福童区では、寺福童遺跡4において中期の中広形銅戈9本が埋納された状態で確認され（5：市報告 221 集）、寺福童遺跡5において柳葉式磨製石鏃を伴う前期の木棺墓や中期を主体とする甕棺墓群等の墓域を中心に遺跡が確認される等（6：市報告 208 集）、人々の活発な活動が判明している。

第１図　福童町遺跡９周辺遺跡分布図（S＝１／25,000）

同時期には、近隣において、小郡・大板井遺跡群（7・8）が広がり、大崎区でも大崎中ノ前遺跡1・2（9：市報告116集・123集）や大崎後原遺跡1・2（10：市報告247集・256集）等弥生時代の集落域がみられる。福童区においても今後これらとの関連を含めた検討や、調査成果が期待される。

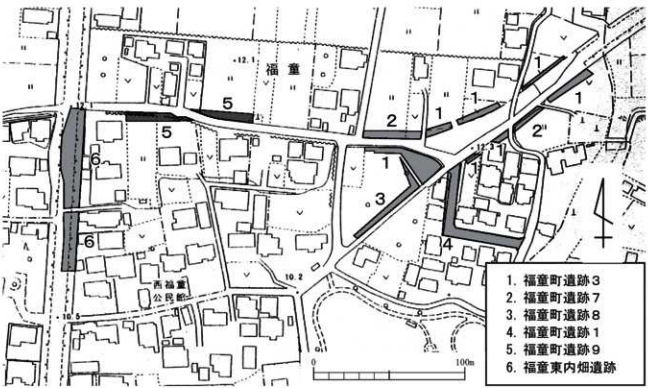
古墳時代になると、福童区では福童町遺跡1・3・8において集落域が確認されている。寺福童区では、寺福童遺跡1（11：市報告144集）において外来系器種を多量に埋置した古墳時代前期の方形周溝墓4基を確認しており、同様に外来系器種が多量に確認されている大崎小園遺跡1・3（12：市報告24集・136集）との関連が注目されている。

古代になると、小郡官衙の周辺集落と考えられる集落域が寺福童遺跡3において確認されている（13：市報告196集）。福童区では、福童町遺跡4・6において区画溝が検出されているものの集落域は未確認である。

中世になると、福童区では福童町遺跡3・7・8を中心に建物群、その周辺に区画溝が検出されている。福童町遺跡の北側に所在する福童山の上遺跡でも区画溝や水田に利用されたと考えられる多数の溝が検出されており（14：市報告100集・114集・170集・171集）、活発な人々の活動が想定される。一方で、寺福童区では以前ほどの活動の痕跡を確認することはできない。

近世になると、福童区では福童町遺跡3において畠、福童東内畑遺跡（15：市報告226集）で井戸や溝など当時の集落域が確認されている。寺福童区では寺福童遺跡2において集落域の区画と考えられる溝が検出されている（16：市報告148集）。

福童区とその周辺において、近年の道路改良工事や宅地開発に起因する調査事例の積み重ねにより、上記のような歴史的背景が判明してきた。また、文献より、福童区・寺福童地区は南北朝期に福童原とも呼ばれていることが知られている。1359年（正平14年・延文4年）の大保原合戦では菊地勢と小弐勢が対陣し、1374年（文中3年・応安7年）には菊池勢と今川了俊とが対陣した地域と推定されている。これまでの埋蔵文化財の発掘調査の成果からも中世以降の痕跡が多々確認されていることから、大保原合戦との関連性についても文献の面からだけでなく、埋蔵文化財の面からも検討し、当時の社会の動向等をより詳細に解明する必要があろう。



第2図　福童町遺跡9調査地位置図（S＝1／2,500）

第３章　遺跡の概要

福童町遺跡9は、小郡市の南部、宝満川と秋光川によって形成された低い丘陵の上に位置し、標高12.6 m前後、遺構検出面で 12.0 m前後を測る。表層は耕作土で、その下層に黒ボク土が堆積し、さらにその下層に遺構検出面である淡い茶褐色ローム層や黄褐色土の地山面となる。黒ボク土は、西側では厚く堆積し、東側に行くにしたがって薄くなる。多くの遺構は地山面より掘り込まれていたが、墓域の墓壙の多くは、表土より 20 ㎝前後耕作土が堆積しており、その下より掘り込まれている。

福童町遺跡9では、北側調査区の墓域を中心に数条の溝を確認した。墓域は、調査区東側において各墓壙どうしが重なり合うように密集した状態で検出された。検出した墓壙は全て方形を呈しており、うち7基で遺骨を埋葬するための肥前製甕を確認し、そのうち1基では、甕の上が石で蓋をされていた。また、肥前製甕を確認した墓壙の内5基において副葬品も出土しており、埋葬された時代を考察するための重要な資料となっている。また、墓域の西側において溝を3条検出しており、墓域の境界としての役割が想定される。特に、最も幅の広い１号溝からは、土師器の皿を中心に五輪塔等多数の遺物が出土した。なお、南側調査区は、調査区の北隣で東西方向に流れる現代の溝の撹乱を受けていたため、遺構を検出することは出来なかった。

福童町遺跡9で検出した主な遺構・遺物は以下のとおりである。

●遺構		●遺物	
・溝	4条	・土師器	・五輪塔
・土坑	1基	・貨幣	・ビー玉
・墓壙	32 基	・鋏	・櫛
・ピット	22 基	・ゴム製札	

第４章　遺構と遺物

１．溝

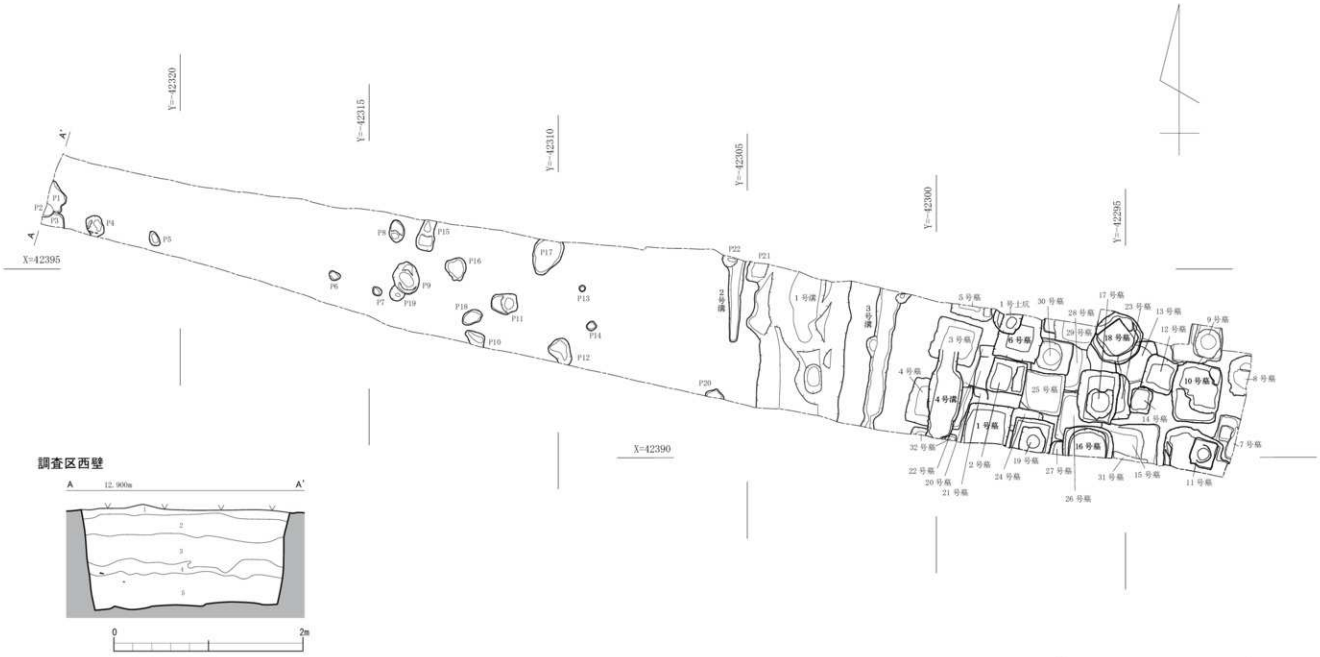
１号溝（第4図、図版2）

調査区のほぼ中央、墓域の西側において検出した溝であり、ほぼ正方位に沿って南北方向に伸びる。溝は、調査区の南北幅いっぱいに伸びており、現状で全長約 3.8 mを測る。幅 260 ㎝、深さ 150 ㎝を測り、断面形状はU字型を呈する。埋土は基本的にはレンズ状堆積であるが、土層の観察より2回掘りなおされていることがわかった。1回目の堆積は 14 層・15 層、2回目の堆積は 11 層～ 13 層であり、3回目の堆積は4層～ 10 層である。特に、3回目の堆積層の8層・9層を中心に骨片や五輪塔、土師皿を中心とした遺物を多く検出しており、1号溝の東側に広がる墓域との関連性が考えられる。また、14 層・15 層からは、第 13 図 10 のように弥生時代中期後半の土器が出土している他、丹塗り土器の小片も出土している。福童町遺跡周辺では、弥生時代の遺構や遺物が確認されていることからも、弥生時代の遺構を壊して1号溝が掘削されたと考えられる。

出土遺物（第 13 図、図版8）

1～6は土師器の皿であり、底部は糸切りが施されている。4～6は土師器の坏であり、5・6はヨコナデの単位が明瞭な程強くナデが施されている。7・8は、土師器の鍋であり、コゲの付着がみられる。7・8は直線的に伸びるタイプの鍋の口縁部片である。9は茶釜のようなタイプの鍋の胴部片である。10 は、弥生土器の甕の口縁部の小片であり、拡先状に拡張している。11 は、五輪塔の空・風輪である。高さは 17.8 ㎝あり、材質は凝灰岩質と考えられる。風輪の下に組み合わせのための突起がみられることから、組合せ式の五輪塔であると想定でき、中世に使用されたものと考えられる。

1～9・11 は 15 世紀～ 16 世紀、10 は弥生時代中期後半の須玖Ⅰ式に相当すると考えられる。



調査区西壁

調査区西壁
1 暗灰褐色土（パサパサしている、乾くと薄灰色になる、1 mm～5 mm大の砂粒を含む）
2 暗褐色土（しまりあり、1 mm以下の砂粒をやや多く含む、シルト）　耕作土
3 褐色土（しまりあり、1 mm以下の砂粒をやや多く含む、シルト）
4 明茶褐色土（黒ボクの上が土体の層、1 mm以下の砂粒を少し含む、土器を含む）――耕作土、黒ボク土
5 黒褐色土（やや粘質、1 mm以下の砂粒を少し含む、土器を含む）――黒ボク土

第3図　福童町遺跡9全体図（S=1/100）

2号溝（第4図、図版2）

調査区のほぼ中央、1号溝の西側において検出した溝であり、1号溝と同様にほぼ正方位に沿って南北方向に伸びる。溝は、調査区の北壁から南方向に約 2.2 m延びたところで遺構の立ち上がりを検出できなくなった。最大幅 45 ㎝、深さ 30 ㎝を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は単層のみであり、人為的な埋め戻しはみられない。遺物は、土師器片数点と1号溝から出土した五輪塔と同じ材質の破片が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

3号溝（第5図、図版2・3）

調査区のほぼ中央、1号溝の東側において検出した溝であり、1号溝と同様にほぼ正方位に沿って南北方向に伸びる。溝は、調査区の南北幅いっぱいに伸びており、現状で全長約 3.8 mを測る。幅 60 ㎝、深さ約 10 ㎝を測り、断面形状は逆台型を呈する。埋土は単層のみであり、人為的な埋め戻しは見られない。遺物は、染付の皿片1点と土器片が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

4号溝（第5図、図版3）

調査区の東側、墓域の西端において検出した溝であり、1号溝と同様にほぼ正方位に沿って南北方向に伸び、3号墓・4号墓・32 号墓を切る。溝は、調査区の南壁から北方向に約 2.05 m伸びた、ちょうど3号墓の遺構中央付近で遺構の立ち上がりを検出できなくなった。しかし、4号溝下層から出土した遺物が 1 号土坑より出土した遺物と接合していることから、4号溝は3号墓を検出した層より上の層において1号土坑へと延びていた可能性も想定される。遺物は、第 13 図 12 の土師器の壺の破片が出土し、その他、土師器の小片が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

2．土坑

1号土坑（第5図、図版3）

調査区の東側、墓域の西側の北壁際にて検出した土坑であり、一部は調査区外に及ぶ。平面形は、80 ㎝× 55 ㎝の半円形を呈し、深さは約 30 ㎝である。遺物は残りの良い土器片が上層より出土しており、4号溝下層から出土した遺物と接合していることから、4号溝との関連性が想定される。また、器形よりこの土器は、蔵骨器として使用された可能性が考えられることから、墓地としての掘り込みとも捉えられる。しかし、人骨が出土していないため、断定はできない。

出土遺物（第 13 図、図版8）

12 は土師器の壺であり、4号溝下層から出土した土器片と接合した。口縁部は内側に肥厚し、外面はヘラ削り、内面は強いハケメを施している。三沢北中尾遺跡5a 地点出土の蔵骨器と類似しており、墓域内で出土していることから、蔵骨器として使用された可能性が想定される。13 は陶器の壺である。外面に緑色の釉薬がかかっている。12・13 ともに現代の遺物と考えられる。

3．墓壙

墓域は、調査区の東側で検出し、総数 32 基である。内訳は、肥前製甕での埋葬7基、釘や鎹などの出土から板を用いた棺と考えられるもの 10 基、骨壺での埋葬1基、その他埋葬形態不明の墓地 14 基である。

以下、各墓地の検出地点については、最初に墓域全体を東、中央、西に区分した際の位置を示し、その後、各区分内での方位を記述することとする。

1号墓（第6図、図版3）

墓域の西側、南端に位置する。一部は調査区の南側に伸び、21 号墓・24 号墓を切る。また、東側には 19 号墓との間に掘り込みがみられるが、これは1号墓に伴う掘り込みと考えられる。墓壙は方形を呈し、上面 120 ㎝× 105 ㎝、底面 105 ㎝× 90 ㎝、深さ 100 ㎝を測る。埋土上層からは弥生土器片が数点出土し、下層からは長さ約 2.0㎝ の鉄製品1点や糸切りを施した土師器片が数点出土していることから、弥生時代の遺構を壊して掘られた墓壙と考えられる。図化できたのは、下層より出土した遺物である。

出土遺物（第 14 図、図版8）

14 は糸切りを施した土師器の皿片である。15 は口径 9.1 ㎝の陶器碗である。小片のため時代を特定できないが、江戸時代以降のものと考えられる。

2号墓（第6図、図版3）

墓域の西側、中央に位置する。北側は6号墓と隣接し、20 号墓・22 号墓・25 号墓を切る。墓壙は表土面から掘り込まれていた可能性がある。墓壙は方形を呈し、上面 95 ㎝× 85 ㎝、底面 70 ㎝× 45 ㎝、深さ 140 ㎝を測り、深さ 95 ㎝のところからさらに長方形に掘り込む二段掘りをしている。埋土の下層からは骨片が少数出土した他、長さ約 4.0 ㎝の鎹が大量に出土していることから、棺は板を用いていた可能性が想定される。その他、土師器や磁器の小片が出土したが、図化するにいたらなかった。

3号墓（第6図、図版3）

墓域の西端、北側に位置し、4号溝に切られる。墓壙は表土面から掘り込まれていた可能性がある。墓壙は方形を呈し、上面 120 ㎝× 110 ㎝、底面 75 ㎝× 75 ㎝、深さ 110 ㎝を測る。埋土の下層や床面直上より、長さ約 4.0 ㎝の鎹が大量に出土し、木片も出土していることから棺は板を用いていた可能性が想定される。また、床面直上からは、貨幣を模倣したと考えられる石製品が2点出土した。その他、埋土中より骨片や糸切りを施した土師器皿片が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

出土遺物（第 14 図、図版8）

16･17 は貨幣を模倣したと考えられる石製品である。16 は 2.2 ㎝× 2.15 ㎝、17 は 2.2 ㎝× 2.2 ㎝と、当時の貨幣の規格に近似している。材質は、緑泥片岩質と考えられ、甕棺の蓋として使用されていた石材と同じものを用いていた。

4号墓（第6図、図版4）

墓域の西端、南側に位置し、4号溝に切られる。墓壙は表土面から掘り込まれていた可能性がある。墓壙は方形を呈し、上面 165 ㎝× 125 ㎝、底面は不定形、深さ 120 ㎝を測る。埋土からは、骨片や五輪塔の火輪と考えられる小片が1点出土した。また、埋土の下層からは、長さ約 3.0 ㎝の鎹が大量に出土していることから、棺は板を用いていた可能性が想定される。

5号墓（第7図、図版4）

墓域の西端、北西隅に位置し、一部は調査区の北側に伸びる。表土直下に約 20 ㎝の耕作土が堆積し、その下から墓壙を検出した。墓壙は現状で長方形を呈し、上面 110 ㎝× 40 ㎝、底面 55 ㎝× 10 ㎝、深さ 65 ㎝を測る。埋土からは、骨片と木片が出土したが、図化するにいたらなかった。

6号墓（第7図、図版4）

墓域の西側、北端に位置し、一部は調査区の北側に伸び、22 号墓・30 号墓を切る。また、6号墓の北西隅には、1号土坑の掘り込みがある。墓壙上面には、約 15 ㎝～ 30 ㎝の耕作土が堆積している。墓壙は方形を呈し、上面 120 ㎝× 120 ㎝、底面 60 ㎝× 65 ㎝、深さ 165 ㎝を測る。埋土下層や床面直上より、長さ約4㎝以下の鎹が大量に出土し、木片も出土していることから棺は板を用いていた可能性が想定される。その他、埋土中より骨片や土師器の甕、磁器の碗が出土した。

出土遺物（第 14 図、図版8）

18 は口径 12.2 ㎝の磁器の碗であり、内外面ともに釉薬が施されている。19 は土師器の甕であり、口縁部外面にススが付着している。19 は古墳時代のものと想定でき、本調査区の周辺には古墳時代の集落が広がっていたことから、墓壙に混入したものと考えられる。

7号墓（第7図、図版4）

墓域の東端、南側に位置し、一部は調査区の東側に伸び、11 号墓に一部切られる。墓壙は長方形を呈し、上面 110 ㎝× 50 ㎝、底面 50 ㎝× 60 ㎝、深さ 10 ㎝を測る。底面には、40 ㎝× 30 ㎝、深さ 15 ㎝の長方形の穴が掘られており、この中に人骨が集骨されていた。埋土の堆積状況より、遺構の上側が削平された可能性はないが、東側が一段低くなっていることから、墓壙の東側には調査区東側壁に伸びる墓壙が1基あった可能性が想定される。底面から掘り込まれた長方形の穴の埋土からは、骨片や青銅製の指輪1点のほか釘が出土していることから棺は板を用いていた可能性が想定される。

8号墓（第7図、図版4）

墓域の東端、北側に位置し、一部は調査区の東側に伸びる。墓壙は隅丸方形を呈し、上面 55 ㎝× 110 ㎝、底面 40 ㎝× 70 ㎝、深さ 50 ㎝を測る。土層より、本来は遺構検出面より上側に 25 ㎝のところから掘り込まれていたが、後世の耕作により上部は削平を受けている。埋土からは、現代の磁器片1点と1号溝から出土した五輪塔と同じ材質の水輪が1点出土している。五輪塔の水輪が出土した層からは河原石が多量に出土しており、検出した地山面と一致していることから、墓壙形成時は、この面が地表面であった可能性が想定される。遺物は、小片のため図化するにいたらなかった。

9号墓（第8図、図版4）

墓域の東側、北端に位置し、一部は調査区の北側に伸び、10 号墓に一部切られる。墓壙は、表土面から掘り込まれていた。墓壙は方形を呈し、上面 130 ㎝× 90 ㎝、底面 90 ㎝× 89 ㎝、深さ 50 ㎝を測る。底面には、棺を埋置するために、75 ㎝× 65 ㎝、深さ 55 ㎝の方形の穴が掘られている。棺は胴径約 45 ㎝の陶器の肥前製甕であり、中には人骨が屈葬の状態で埋置されていた他、貨幣が1点出土した。その他、棺の上から骨片や現代の土師器・磁器片、鉄製の鍵を検出したが、図化するにいたらなかった。

出土遺物（第 14 図、図版8・9）

20 は直径 2.3 ㎝、厚さ 0.2 ㎝の貨幣である。現在は全面に錆が広がってしまったため製造年は不明であるが、材質や規格より1銭硬貨と考えられる。21 の甕の中より出土した。21 は肥前製の甕である。口径 55.0 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には2条の沈線が施されている。内外面ともに錆釉がみられる。

10 号墓（第8図、図版5）

墓域の東側、中央に位置し、9号墓・12 号墓を切る。墓壙は方形を呈し、上面 130 ㎝× 155 ㎝、底面 100 ㎝× 95 ㎝、深さ 60 ㎝を測る。埋土中からは、骨片が数点出土した。

11 号墓（第8図、図版5）

墓域の東端、南隅に位置し、一部は調査区の南側に伸び、7号墓を切る。墓壙検出地点より標高の高い部分には、造成土が堆積している。墓壙は長方形を呈し、上面 160 ㎝× 110 ㎝、底面 130 ㎝× 90 ㎝、深さ 50 ㎝を測る。底面には、棺を埋置するために、75 ㎝× 65 ㎝、深さ 55 ㎝の方形の穴が掘られている。棺は胴径約 45 ㎝の陶器の肥前製甕であり、甕の中は底部より 10 ㎝位の高さまで籾殻が堆積していた。甕の最下層から、「デパート旭屋」という印を押したゴム製の札が出土した。デパート旭屋は、昭和 12 年に現在の西鉄久留米駅の駅前近くに開店したデパートであることから、少なくとも昭和 12 年以降に埋葬されたと考えられる。その他、埋土の下層からは、長さ約 4.0 ㎝の釘が2点出土した。

出土遺物（第 14 図、図版8・9）

22 は厚さ 0.6 ㎝のゴム製の札である。表面には、「デパート旭屋」と刻印された建物が描かれており、裏面は籾殻の圧痕がみられる。紐を通すためか、孔が1つあけられている。23 は肥前製の甕である。口径 43.2 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には3条の沈線が施されている。内面にのみ錆釉がみられる。

12 号墓（第8図、図版5）

墓域の東側、やや北よりに位置し、14 号墓に隣接し、13 号墓を切り、10 号墓に切られる。墓壙は方形を呈し、上面 95 ㎝× 90 ㎝、底面 60 ㎝× 60 ㎝、深さ 130 ㎝を測る。埋土の下層からは、長さ約 4.0 ㎝の鎹が多量に出土した他、木片も出土していることから、棺は板を用いていた可能性が想定される。その他、骨片や土器片が数点出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

13 号墓（第9図、図版5）

墓域の東側、やや北よりに位置し、12 号墓・17 号墓・18 号墓・23 号墓に切られている。墓壙は、本来は方形を呈していたと考えられ、上面 85 ㎝× 110 ㎝、底面 80 ㎝× 85 ㎝、深さ約 55 ㎝を測る。埋土の下層からは、長さ約 4.0 ㎝の鎹が大量に出土しており、このことから棺は板を用いていた可能性が想定される。その他、骨片や土師器片が2点出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

14 号墓（第9図、図版5）

墓域の東側、中央に位置し、23 号墓の一部を切り、12 号墓と隣接する。墓壙は方形を呈し、上面 70 ㎝× 55 ㎝、底面 50 ㎝× 40 ㎝、深さ 30 ㎝を測る。埋土からは骨片、土師器や青磁の小片が数点出土したが、図化するにいたらなかった。

15 号墓（第9図、図版6）

墓域の東側、南端に位置し、一部は調査区の南側に伸び、16 号墓・17 号墓・31 号墓に切られ、26 号墓を切る。墓壙は、表土面から掘り込まれていた。墓壙は長方形を呈し、上面 150 ㎝× 100 ㎝、底面 80 ㎝× 70 ㎝、深さ 85 ㎝を測る。中段と同じ高さで、骨壺と骨壺から南東に約 50 ㎝のところで骨の小片を検出した。骨壺の人骨は、骨壺の中からだけでなく、骨壺の下からも検出された。その他、埋土からは長さ約 3.0 ㎝の釘や現代の陶器片が出土したが、図化するにいたらなかった。

出土遺物（第 15 図、図版8）

24・25 は陶器製の蔵骨器の蓋と容器である。24 は口径 18.0 ㎝、高さ 3.9 ㎝であり、頂部には円形のつまみが付いている。外面には、オレンジ色の釉薬が施されている。25 は口径 15.4 ㎝、高さ 18.2 ㎝であり、外面の釉薬は剥げている。

16 号墓（第9図、図版6）

墓域の中央、南端に位置し、一部は調査区の南側に伸び、15 号墓・26 号墓・27 号墓を切る。墓壙は、表土面から掘り込まれていた。墓壙は方形を呈し、上面 130 ㎝× 80 ㎝、底面 90 ㎝× 65 ㎝、深さ 170 ㎝を測る。棺は胴径約 50 ㎝の陶器の肥前製甕であり、甕全体に木の根が貼り巡っていた。棺の上は、緑泥片岩質の石の蓋で塞がれており、その上から調査区の南壁につき刺さった状態で、棺と同じ種類の甕の破片（第 15 図 26）が出土した。その他、埋土からは長さ約 2.0 ㎝の釘や土師器皿の小片が出土したが、図化するにいたらなかった。

出土遺物（第 15 図、図版9）

26 は肥前製の甕である。口径 48.4 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外側には3条の沈線が施されている。27 も肥前製の甕である。口径 53.2 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には3条の沈線が施され、内外面ともに錆釉がみられる。

17 号墓（第 10 図、図版6）

墓域の中央に位置し、13 号墓・15 号墓・23 号墓・26 号墓・28 号墓を切る。墓壙は表土面から掘り込まれていた可能性がある。墓壙は長方形を呈し、上面 140 ㎝× 110 ㎝、底面 120 ㎝× 70 ㎝、深さ 160 ㎝を測る。棺は胴径約 60 ㎝の陶器の肥前製甕であり、底部より 20 ㎝位の高さまで籾殻が堆積していた。棺の上には、緑泥片岩質の石の蓋が遺構の壁に立てかけた状態で検出できた。また、墓壙内の北側、甕検出面より上の墓壙中位からほぼ完形の土師皿1点を検出した他、東側からは長さ約 8.5 ㎝の釘が出土した。甕の中からは、副葬品と思われる遺物や人骨が出土している。

出土遺物（第 15 図、図版9）

28 は墓壙の中位より出土したほぼ完形の土師器の皿であり、底部は糸切りを施している。29 はビー玉、30 は櫛であり、31 の甕の中より出土した。31 は肥前製の甕である。口径 57.2 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には2条の沈線が施され、胴部の外面には円形の浮文が1つ付けられている。

18 号墓（第 10 図、図版7）

墓域の中央、北端に位置し、一部は調査区の北側に伸び、13 号墓・29 号墓を切る。墓壙は、表土面から掘り込まれていた。墓壙は方形を呈し、上面 130 ㎝× 125 ㎝、底面 70 ㎝× 80 ㎝、深さ 150 ㎝を測る。棺は胴径約 70 ㎝の陶器の肥前製甕であり、底部より 20 ㎝位の高さまで籾殻が堆積していた。棺の上には、緑泥片岩質の石の蓋を遺構の壁に立てかけた状態で検出した。この石の蓋の上からは、拳大の川原石が墓壙検出面の一面で多量に出土した。甕の中からは、人骨が出土している。

出土遺物（第 16 図、図版9）

32 は肥前製の甕である。口径 53.7 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には2条の沈線が施されている。内外面ともに錆釉がみられる。

19 号墓（第 11 図、図版7）

墓域の中央、南端に位置し、一部は調査区の南側に伸び、24 号墓を切る。墓壙は、表土面から掘り込まれていた。墓壙は方形を呈し、上面 80 ㎝× 105 ㎝、底面 70 ㎝× 70 ㎝、深さ約 120 ㎝を測る。底面の約 30 ㎝下からは、棺を埋置するために、上面 60 ㎝× 65 ㎝、底面径 35 ㎝、深さ約 45 ㎝の穴が掘られている。棺は胴径約 59.2 ㎝の陶器の肥前製甕であるが、出土時は口縁部から胴部下半にかけて無数の破片となっていた。

出土遺物（第 16 図、図版9）

33 は土師器の坏であり、外面は回転ヨコナデの単位が明瞭に残り、底部は糸切りを施している。34 は青磁の碗の破片である。35 は土師器の鍋の小片である。36 は肥前製の甕である。口径 49.4 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には2条の沈線が施されている。内外面ともに錆釉がみられる。33 ～ 35 は墓壙の埋土中から検出したものであり、36 の甕には伴わない。

20 号墓（第6図）

墓域の東側、中央に位置する。検出した墓壙の大部分は、2号墓と 21 号墓に切られているため規模は不明であるが、2号墓の最下層に向かって傾斜して掘られており、深さは約 140 ㎝を測る。埋土の下層からは、長さ約 5.0 ㎝の鏃が大量に出土しており、このことから棺は板を用いていた可能性が想定される。その他、土器片1点が出土したが、図化するにいたらなかった。

21 号墓（第6図）

墓域の東側、中央に位置する。検出した墓壙の大部分は、1号墓・4号墓に切られているため規模は不明であるが、深さは約 40 ㎝を測り、20 号墓を切っている。遺物の出土はみられなかった。

22 号墓（第6図）

墓域の東側、中央に位置する。検出した墓壙の大部分は2号墓・6号墓・20 号墓に切られているため規模は不明である。墓壙は、2号墓と6号墓に向かって傾斜して掘られているため深さも不明である。遺物の出土はみられなかった。

23 号墓（第 10 図）

墓域の東側、中央に位置する。検出した墓壙の大部分を西側に隣接する 17 号墓に切られ、東側の一部を 14 号墓に切られ、13 号墓の一部を切っている。そのため、墓壙の形状はほとんど残存していないものの、現状で上面 120 ㎝、底面 100 ㎝、深さ 70 ㎝を測る。遺物の出土はみられなかった。

24 号墓（第 11 図）

墓域の中央、やや南側に位置する。検出した墓壙の大部分は、1号墓・19 号墓に切られているため規模は不明であるが、深さは約 50 ㎝を測り、25 号墓を切っている。埋土からは、長さ約 7.5 ㎝の釘が1本出土しており、棺は釘を使用した板を用いていた可能性が想定される。

25 号墓（第 11 図、図版7）

墓域の中央、西側に位置し、2号墓・24 号墓に切られ、26 号墓・28 号墓・30 号墓を切る。墓壙は方形を呈し、上面 110 ㎝× 110 ㎝、底面 90 ㎝× 90 ㎝、深さ約 170 ㎝を測る。底面に埋置する形で、肥前製甕の棺が出土したが、口縁部から胴部下半にかけて無数の破片となって出土した。棺を埋置するための掘り込みはみられなかった。また、埋土の下層より長さ約 4.0 ㎝の釘が2本出土していることから、棺に釘を使用していた可能性も想定される。骨片が数点出土した。遺物は、甕の他に土師器片1点、陶器片1点、磁器片1点が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

出土遺物（第 16 図、図版9）

37 は肥前製の甕である。口径 50.2 ㎝、口縁部は内側が玉縁状に拡張しており、頸部の外面には3条の沈線が施されている。内外面ともに、7本1単位の格子目文タタキを施している。

26 号墓（第 10 図）

墓域の中央、やや南側に位置する。検出した墓壙の大部分は、15 号墓・16 号墓・17 号墓・25 号墓に切られる。墓壙は、現状で上面 120 ㎝× 55 ㎝、底面 105 ㎝× 50 ㎝、深さ 60 ㎝を測る。遺物は、土師器片2点と磁器片1点が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

27 号墓（第 11 図、図版7）

墓域の中央、南端に位置し、19 号墓に隣接する。検出した墓壙の大部分は、16 号墓に切られ、一部は調査区の南側に伸びているため、規模は不明であるが、深さは 100 ㎝を測る。遺物は埋土中から陶器の皿1点が出土した。

出土遺物（第 16 図、図版9）

38 は陶器の皿であり、内外面釉薬が施され、内面には一筆書きで文様が施されている。現代の遺物と考えられる。

28 号墓（第 11 図）

墓域の中央、やや北よりに位置する。検出した墓壙の大部分は、17 号墓・25 号墓・29 号墓、30 号墓に切られる。墓壙は、現状で上面 110 ㎝× 60 ㎝、底面 105 ㎝× 40 ㎝、深さ 35 ㎝を測り、一辺の規模は現状で不明であるものの、形態より方形の墓壙であった可能性が想定できる。遺物は土師器の皿片1点と染付の皿片1点が出土したが、小片のため図化するにいたらなかった。

29 号墓（第 12 図、図版7）

墓域の中央、北端に位置する。18 号墓に切られ、28 号墓・30 号墓を切る。墓壙は方形を呈し、上面 90 ㎝× 105 ㎝、底面 85 ㎝× 100 ㎝、深さ 55 ㎝を測る。底面には、上面径 70 ㎝、底面径 45 ㎝、深さ 45 ㎝の円形の穴が掘られており、墓域の他の墓壙の規格から、当初はこの墓壙にも甕の棺が埋葬されていた可能性が考えられる。遺物は、土師器の壺片1点が出土したが、小片で磨滅が激しく図化するにいたらなかった。

30 号墓（第 12 図、図版7）

墓域の中央、やや北よりに位置し、6号墓・25 号墓・29 号墓に切られ、28 号墓を切る。墓壙は方形を呈し、上面 105 ㎝× 95 ㎝、底面 95 ㎝× 90 ㎝、深さ 50 ㎝を測る。底面には、棺を埋置するために掘られたと考えられる 70 ㎝× 70 ㎝、深さ 45 ㎝の円形の穴を検出したが、埋土中で棺等の遺物はみられなかった。

31 号墓（第9図）

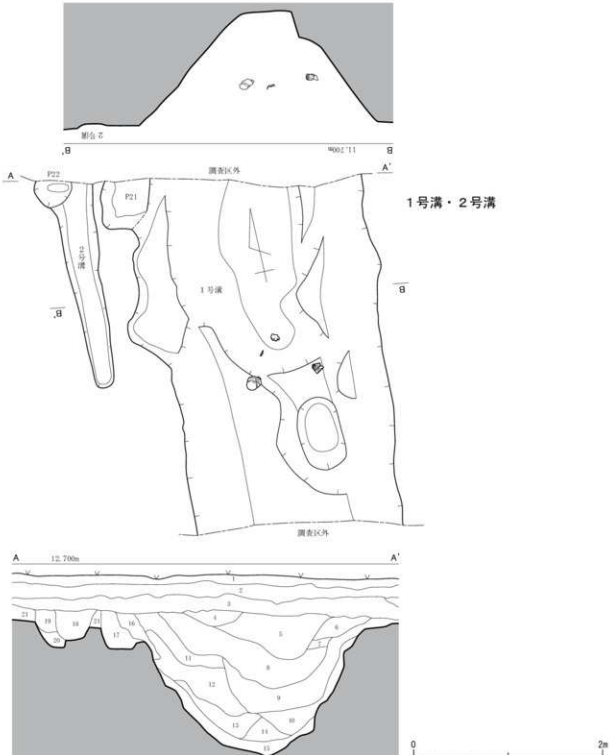
墓域の東側、南端に位置する。15 号墓を切るように、調査区の南壁に沿って墓壙の上端一辺 90 ㎝を検出しており、遺構の底面は調査区外に広がると考えられる。遺物の出土はみられなかった。

32 号墓（第 12 図）

墓域の西側、南端に位置し、4号溝に切られている。表土面直下に約 60 ㎝の耕作土が堆積し、その下から墓壙を検出した。墓壙は方形を呈し、現状で上面 120 ㎝× 20 ㎝、底面 55 ㎝× 10 ㎝、深さ約 35 ㎝を測り、調査区外に広がると考えられる。遺物の出土はみられなかった。

4．ピット（第3図）

調査区の西側から中央にかけて 22 基のピットを確認した。ピットの埋土は黒褐色、灰褐色、暗灰褐色を基調としている。遺物はP3、P6より土師器の小片が少量出土したのみであり、図化するにはいたらなかった。



1号溝
1 薄灰褐色土（やや粘質、パサパサしている。0.5㎜～1㎜大の砂粒を多く含む）
2 褐色土（しまりあり、1㎜～2㎜大の砂粒を多く含む）　耕作土
3 明茶褐色土（やや粘質、しまりあり。0.5㎜～3㎜大の砂粒を多く含む。炭を若干含む）
4 暗茶褐色土（やや粘質、しまりあり。0.5㎜～1㎜大の砂粒を多く含む）
5 暗茶褐色土（やや粘質、しまりあり。0.5㎜～2㎜大の砂粒をやや多く含む。4層よりやや黒みがある）
6 暗褐色土（やや粘質、しまりあり。1㎜～2㎜大の砂粒をやや多く含む）
7 暗褐色土（やや粘質、しまりあり。1㎜大の砂粒を少し含む。炭褐色土が混ざる、骨の小片を含む）
8 茶褐色土（やや粘質、しまりあり。0.5㎜～1㎜大の砂粒を少し含む。骨の小片や土器を含む）
9 炭褐色土（粘質、しまりあり。0.5㎜～2㎜大の砂粒をやや多く含む。土器と石を含む）
10 暗灰褐色土（やや粘質、しまりあり。1㎜～2㎜大の砂粒をやや多く含む。黄褐色土の砂質が混ざる）
11 暗褐色土（やや粘質、しまりあり。0.5㎜～1㎜大の砂粒を少し含む）
12 暗褐色土（粘質、しまりあり。1㎜大の砂粒をやや多く含む。黄褐色土が混ざる）
13 黄褐色土（砂質、やや粘質、しまりあり。1㎜大の砂粒をやや多く含む。黄褐色土が混ざる）
14 明褐色土（砂層、しまりあり。1㎜大の砂粒を多く含む。土器片を含む）
15 黄褐色土（砂層、しまりあり。1㎜大の砂粒を多く含む）
16 黄褐色土（暗灰褐色土が混ざる）

P21
17 褐色土（やや粘質、しまりあり、1㎜大の砂粒を多く含む、明褐色土が混ざる）

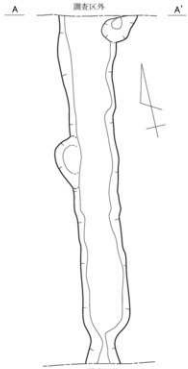
2号溝
18 暗茶褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5㎜大の砂粒をわずかに含む）

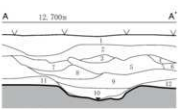
P22
19 暗茶褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5㎜大の砂粒を少し含む、18層より明るみのある土）
20 明褐色土（しまりあり、0.5㎜大の砂粒を少し含む）

確認面
21 暗茶褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5㎜以下の砂粒を少し含む、明るみのある土）

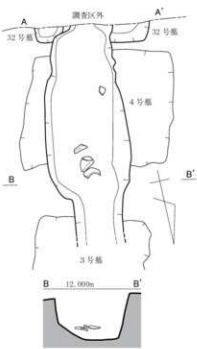
第4図　1・2号溝実測図（S＝1／40）

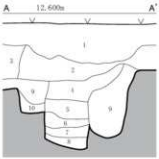
3号溝





4号溝・32号墓





4号溝・32号墓　南側壁面

1 基褐色土
2 黒褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm～2mm大の砂粒やや多く混ざる、黒ボク）
3 黄褐色土（しまりあり、1mm～2mm大の砂粒やや多く混ざる、黒灰褐色土が少し混ざる）
4 薄灰褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm～2mm大の砂粒をやや多く含む、黄褐色のブロックが混ざる）
5 灰褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm大の砂粒やや多く混ざる）
6 暗灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm大の砂粒少し混ざる）
7 暗褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm大の砂粒やや多く混ざる、黄褐色の砂が混ざる）
8 暗灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm大の砂粒やや多く混じる）
9 明灰褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm大の砂粒やや多く混ざる、黄褐色の砂層のブロック混ざる）
10 薄褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm大の砂粒混ざる、灰褐色土混ざる）

盛成土
4号溝
32号墓

3号溝　北側壁面

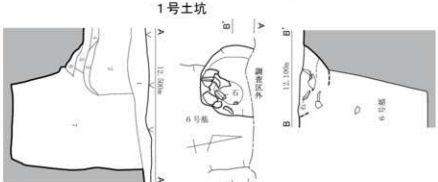
1 暗灰褐色土（パサパサしている、乾くと薄灰色に）
2 暗褐色土（しまりあり、1mm以下のシルトをやや多く含む）
3 褐色土（しまりあり、1mm以下のシルトを少し含む、非常に固い）
4 黒色土（砂層、パサパサしている、1mm以下の砂で形成されている）
5 黒色土（砂質、パサパサしている、1mm～2mm大の砂粒で砂が形成されている）
6 褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm以下のシルトを少し含む、黒褐色土混ざる、3層に黒ボクが混ざった層）

耕作土

7 暗褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm以下のシルトを少し含む）
8 薄茶褐色土（やや粘質、しあまりあり、1mm以下のシルトを少し含む）
9 黒褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm以下のシルトを少し含む）
10 薄茶褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm以下のシルトを極わずかに含む、石含む、遺構の埋土）
11 暗茶褐色土（やや粘質、しまりあり、1mm以下のシルトを少し含む、黒褐色のブロック混じる）
12 11層と同じ

黒ボク土
3号溝
確認面

1号土坑

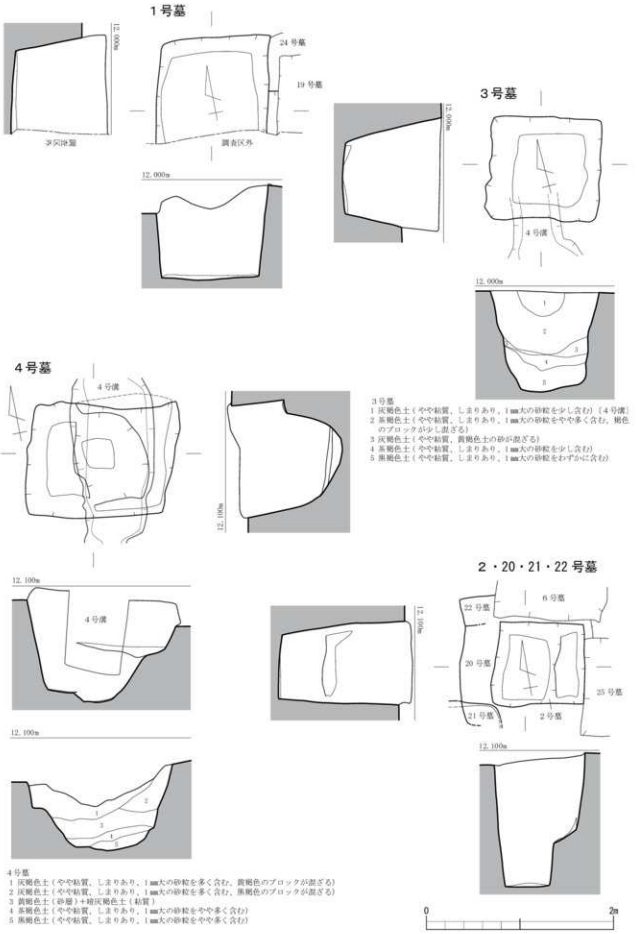


1号土坑
1 灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm以下の砂粒が少し混ざる）
2 灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm以下の砂粒をやや多く含む、黄褐色のブロック混ざる）
3 暗灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm以下の砂粒がやや多く含む）
4 灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm以下の砂粒をやや多く含む）
5 薄褐色土（砂粒、パサパサしている）
6 暗灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm以下の砂粒をやや多く含む）
7 暗灰褐色土（やや粘質、しまりあり、0.5mm以下の砂粒を多く含む、黄褐色のブロック混ざる）

耕作土
1号土坑
埋積土
6号墓

0　2m

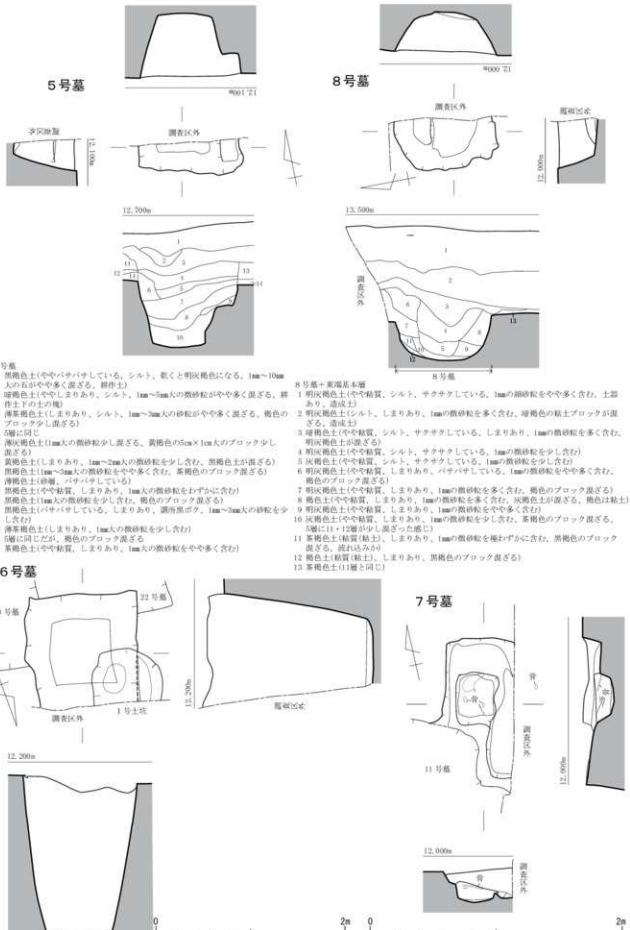
第5図　3・4号溝、1号土坑、32号墓実測図（S＝1／40）



3号墓
1 灰褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒を少し含む）［4号溝］
2 茶褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒をやや多く含む，褐色のブロックが少し混ざる）
3 灰褐色土（やや粘質，黄褐色土の砂が混ざる）
4 茶褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒を少し含む）
5 黒褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒をわずかに含む）

4号墓
1 灰褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒を多く含む，黄褐色のブロックが混ざる）
2 灰褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒を多く含む，黒褐色のブロックが混ざる）
3 黄褐色土（砂質）＋暗灰褐色土（粘質）
4 茶褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒をやや多く含む）
5 黒褐色土（やや粘質，しまりあり，1㎜大の砂粒をやや多く含む）

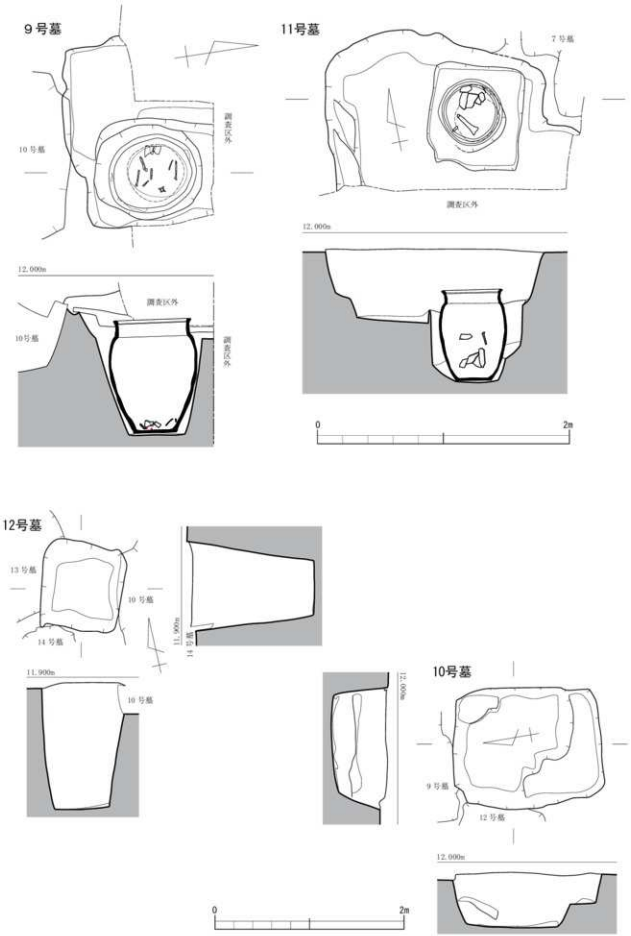
第6図　1・2・3・4・20・21・22号墓実測図（S＝1／40）



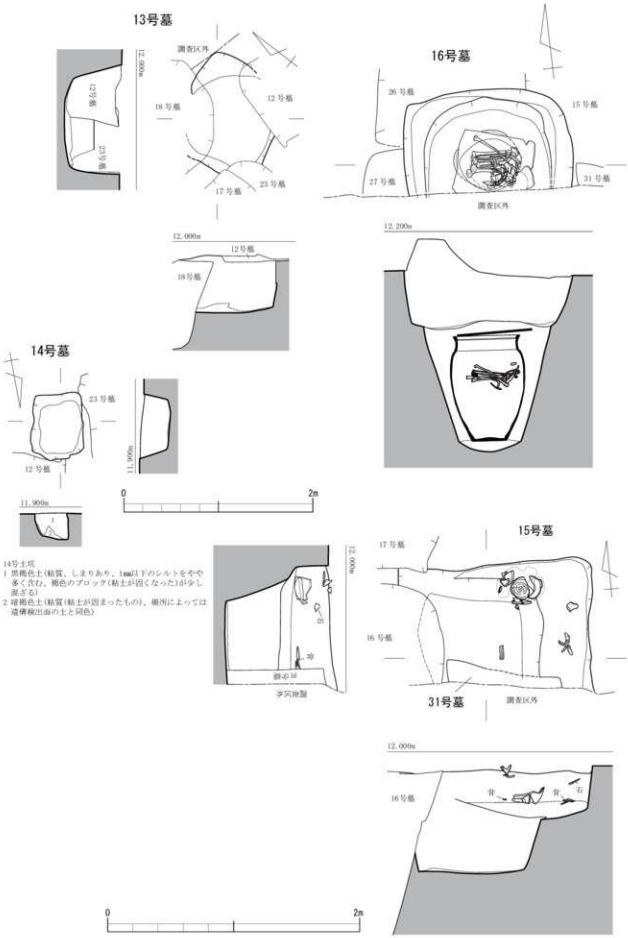
5号墓
1 黒褐色土(ややパサパサしている。シルト。軟くと明灰褐色になる。1mm～10mm大の石がやや多く混ざる。耕作土)
2 暗褐色土(ややしまりあり。シルト。1mm～5mm大の微砂粒がやや多く混ざる。耕作土下のまの場)
3 薄茶褐色土(しまりあり。シルト。1mm～3mm大の砂粒がやや多く混ざる。褐色のブロック少し混ざる)
4 5層に同じ
5 薄灰褐色土(1mm大の微砂粒少し混ざる。黄褐色の5cm×1cm大のブロック少し混ざる)
6 黄褐色土(しまりあり。1mm～2mm大の微砂粒を少し含む。黒褐色土が混ざる)
7 黒褐色土(1mm～3mm大の微砂粒をやや多く含む。茶褐色のブロック混ざる)
8 薄褐色土(砂層、パサパサしている)
9 黒褐色土(やや粘質。しまりあり。1mm大の微砂粒をむずかに含む)
10 黒褐色土(1mm大の微砂粒を少し含む。褐色のブロック混ざる)
11 黒褐色土(パサパサしている。しまりあり。調所黒ボク、1mm～3mm大の砂粒を少し含む)
12 薄茶褐色土(しまりあり。1mm大の微砂粒を少し含む)
13 5層に同じだが、褐色のブロック混ざる
14 茶褐色土(やや粘質。しまりあり。1mm大の微砂粒をやや多く含む)

8号墓・東端基本層
1 明灰褐色土(やや粘質。シルト。サクサクしている。1mmの細砂粒をやや多く含む。土器あり。造成土)
2 明灰褐色土(シルト。しまりあり。1mmの微砂粒を多く含む。暗褐色の粘土ブロックが混ざる。造成土)
3 暗褐色土(やや粘質。シルト。サクサクしている。しまりあり。1mmの微砂粒を多く含む。明灰褐色土が混ざる)
4 明灰褐色土(やや粘質。シルト。サクサクしている。1mmの微砂粒を少し含む)
5 灰褐色土(やや粘質。シルト。サクサクしている。1mmの微砂粒を少し含む)
6 明灰褐色土(やや粘質。しまりあり。パサパサしている。1mmの微砂粒をやや多く含む。褐色のブロック混ざる)
7 明灰褐色土(やや粘質。しまりあり。1mmの微砂粒を多く含む。褐色のブロック混ざる)
8 褐色土(やや粘質。しまりあり。1mmの微砂粒を多く含む。灰褐色土が混ざる。褐色は粘土)
9 明灰褐色土(やや粘質。しまりあり。1mmの微砂粒をやや多く含む)
10 灰褐色土(やや粘質。しまりあり。1mmの微砂粒を少し含む。茶褐色のブロック混ざる。9層には・12層が少し混ざった感じ)
11 茶褐色土(粘質(粘土)。しまりあり。1mmの微砂粒を極わずかに含む。黒褐色のブロック混ざる。流れこみかゃ)
12 褐色土(粘質(粘土)。しまりあり。黒褐色のブロック混ざる)
13 茶褐色土(11層と同じ)

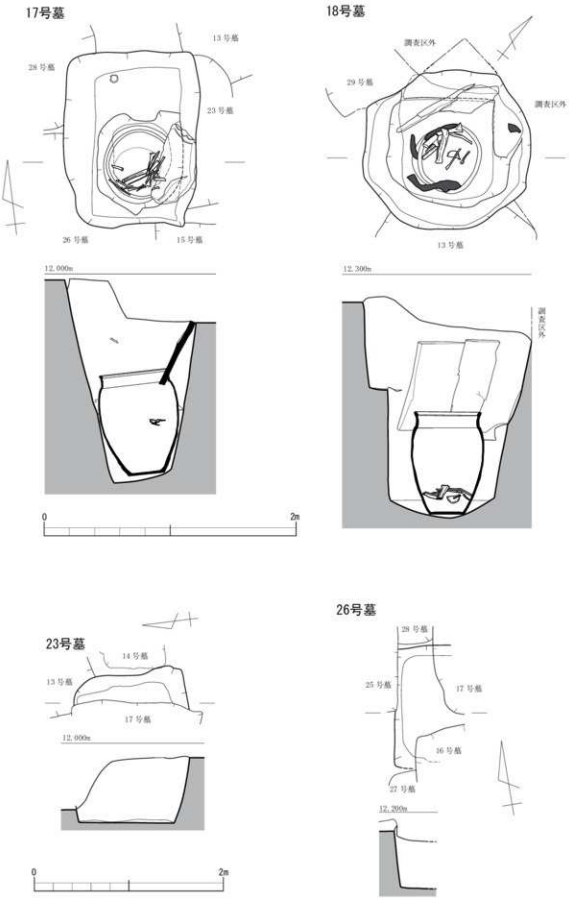
第7図　5・6・7・8号墓実測図（7号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）



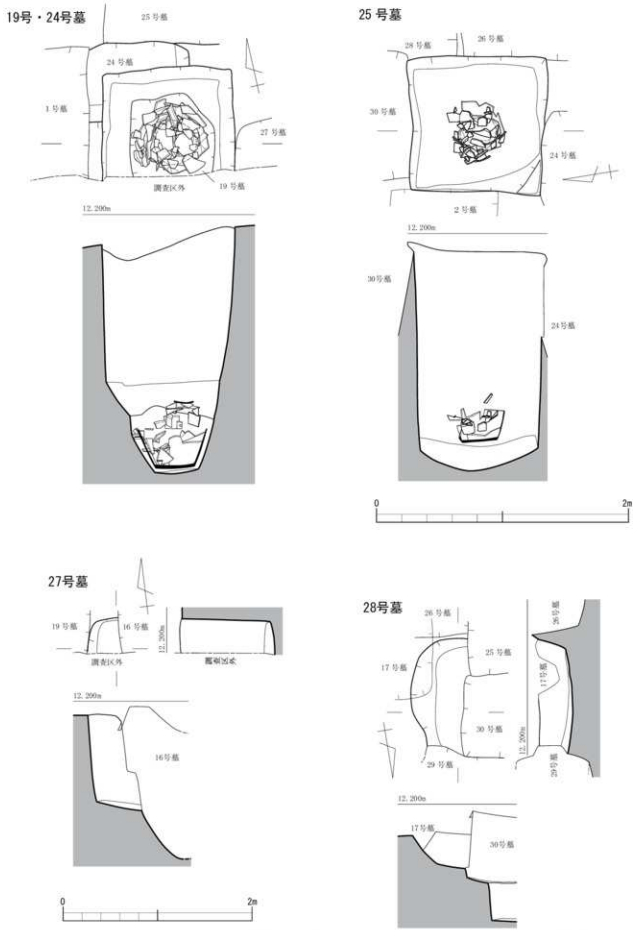
第8図　9・10・11・12号墓実測図（9・11号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）



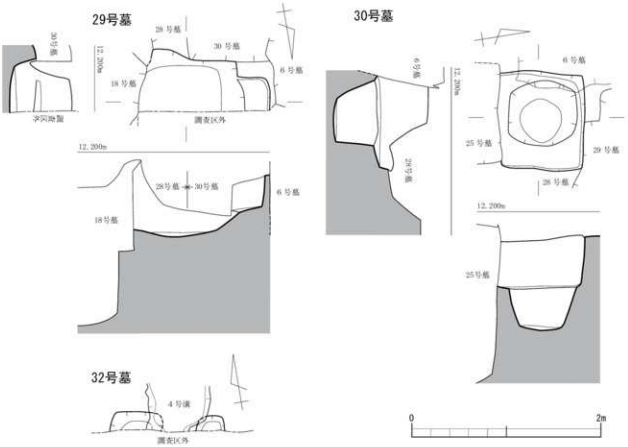
第9図　13・14・15・16・31 号墓実測図（15・16・31 号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）



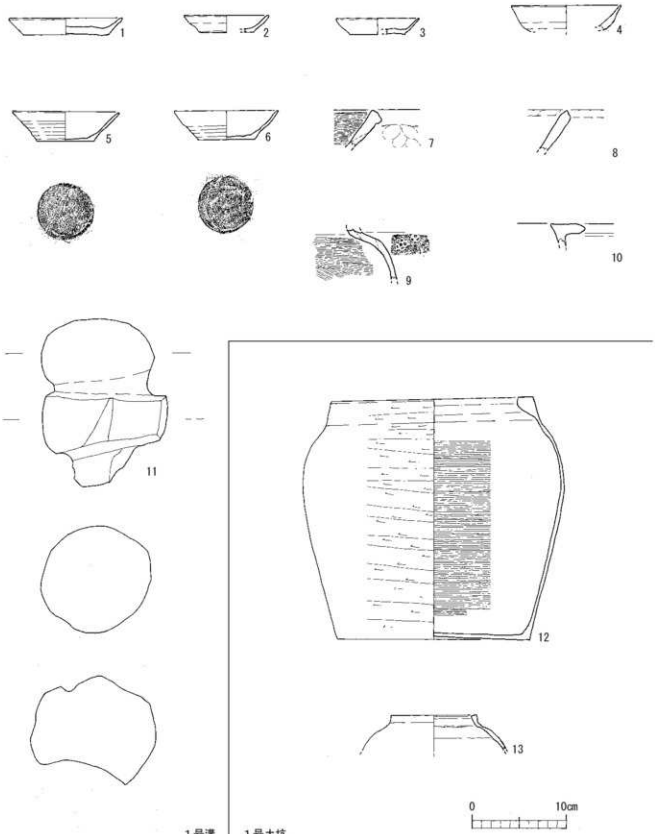
第 10 図　17・18・23・26 号墓実測図（17・18 号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）



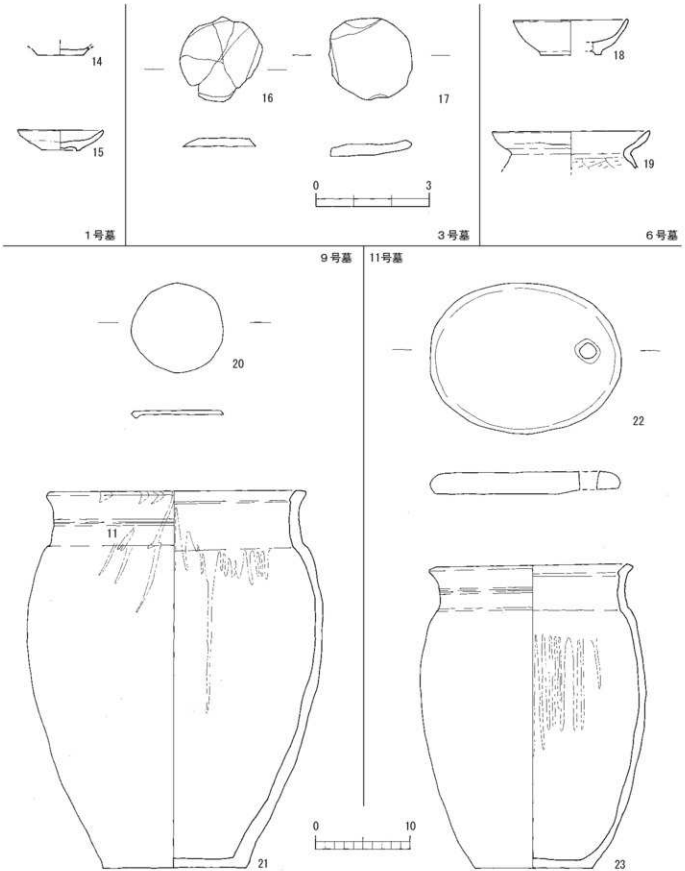
第11図　19・24・25・27・28号墓実測図（19・24・25号墓：S＝1／30、他：S＝1／40）



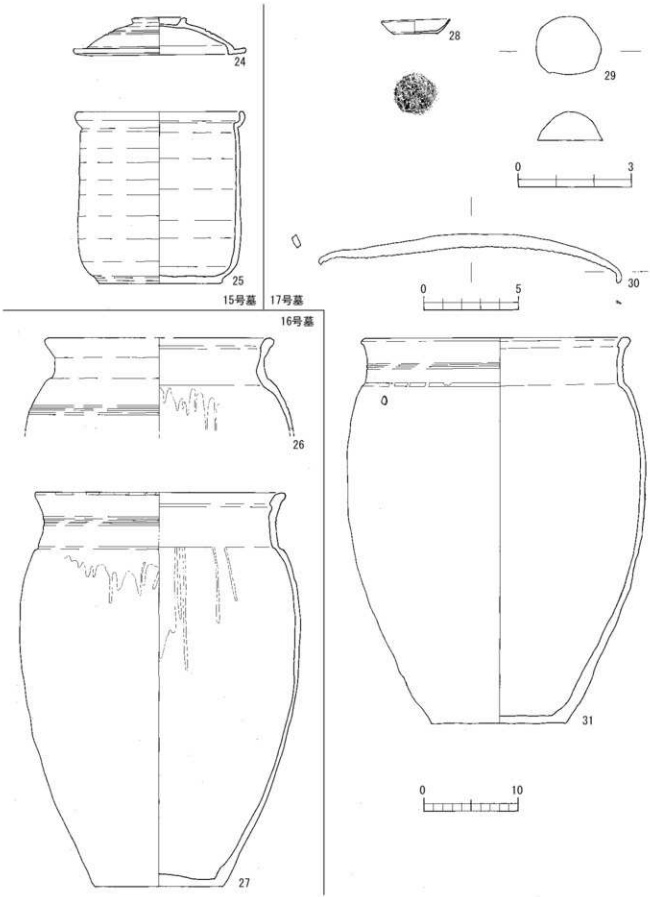
第12図 29・30・32号墓実測図（S＝1／40）



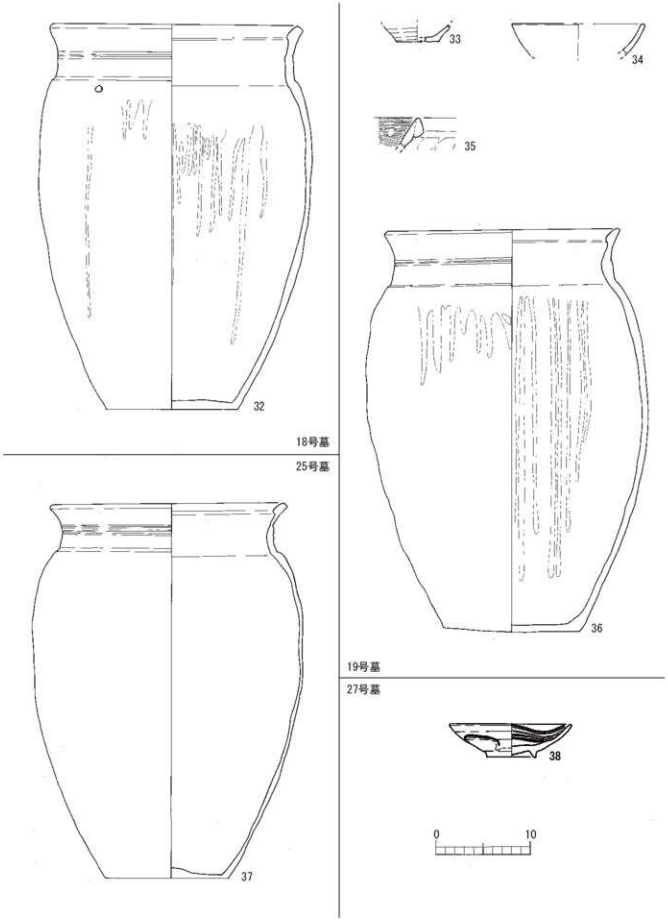
第13図　1号溝、1号土坑出土遺物実測図（S＝1／4）



第14図　1・3・6・9・11号墓出土遺物実測図(16・17・20・22:S＝1／1、21・23:S＝1／8、その他:S＝1／4)



第15図　15･16･17号墓出土遺物実測図(29:S＝1／1,30:S＝1／2,26･27･31:S＝1／8,その他:S＝1／4)



第16図 18・19・25・27号墓出土遺物実測図（32・36・37：S＝1／8、その他：S＝1／4）

第５章　福童町遺跡９出土人骨について

谷澤亜里 1)・高椋浩史 1)・中井歩 1)・早川和賀子 1)・米元史織 1)・舟橋京子 2)・田中良之 3)

1) 九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

2) 九州大学総合研究博物館

3) 九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座

はじめに

小郡市福童町遺跡9は、小郡市教育委員会によって発掘調査が行われ、人骨も多数出土した。そこで、出土した人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

人骨出土状態

【2 号墓】

方形の墓壙から火葬骨片が出土している。

【3 号墓】

方形の墓壙から火葬骨片が出土している。土師皿 1 点と石製品 2 点を共伴する。

【4 号墓】

方形の墓壙から火葬骨片が出土している。また、動物の歯牙片が共伴しており、大型哺乳類のものである可能性がある。

【5 号墓】

調査区北壁に切られる長方形の墓壙から、火葬骨片が出土している。

【6 号墓】

調査区北壁に切られる方形の墓壙から、火葬骨片が出土している。

【7 号墓】

調査区東壁に切られる長方形の墓壙内の方形の掘り込みから、特に北西側に集中して火葬骨片が出土している。なお、人骨とともに、指輪と考えられる環状の青銅製品 1 点と釘が出土している。

【9 号墓】

方形の墓壙内に埋置された肥前製陶器の甕棺底から、人骨が出土している。保存状態が良くないため、本来の埋葬状態は不明である。また、甕棺の上からも骨片が出土している。なお、棺内からは漆喰片が出土している。この他に動物骨片も出土している。

【11 号墓】

長方形の墓壙内に埋置された肥前製陶器の甕棺内から、人骨が出土している。右脛骨が近位を南東側に向けて出土し、棺底部付近から左脛骨が出土しているが、詳細な埋葬姿勢は不明である。甕棺の底部より 10cm ほどの高さまで籾殻が堆積している。また、甕棺内からゴム製の札と漆喰片、甕棺外から金具が数点出土している。

【15 号墓】

調査区南壁に切られる長方形の二段掘り墓壙の上段から、骨壺と人骨片が出土している。骨壺より南東に 50cm 程の位置から左右不明の大腿骨、右尺骨が、骨壺より南西に 50cm 程の位置から部位同定困難な骨片が、骨壺内と骨壺下からは火葬骨片が出土している。骨壺内と骨壺下の骨は火葬されているが、骨壺と離れて出土した骨は火を受けておらず、また、両者から右尺骨の同一部位が出土していることから、骨壺内・骨壺下と、骨壺外とでは、別個体が埋葬されていた可能性が高い。以下では、火葬された個体を 15-a 号人骨、火葬されていない個体を 15-b 号人骨とする。いずれも、保存状態が良くないため、本来の状態は不明である。

【16 号墓】

方形の墓壙内に埋置された肥前製陶器の甕棺内より、人骨が出土している。棺内西側から、長軸方向を東西にそろえて重なった状態で下肢骨が出土している。下肢骨は、右側が北、左側が南であり、大腿骨は近位が東を、脛骨は近位が西を向く。下肢よりも高い位置の棺内東側から、右上腕骨・肋骨・肩甲骨・椎骨が出土している。右上腕骨は、長軸を北西－南東方向にそろえ、近位を北西に向けて出土している。椎骨は、ほぼ関節状態を保って南北方向に並んで出土している。以上より、本個体は西向きの座葬であった可能性がある。しかし、遺存状態が良好であるにもかかわらず頭蓋骨が確認されず改葬されたと考えられ、加えて四肢骨の多くが長軸を揃えてまとまった状態で出土していることから、改葬時に若干動かされた可能性も考えられる。

【17 号墓】

長方形の墓壙内に埋置された肥前製陶器の甕棺内より、人骨が出土している。棺内東側から南側にかけて、左大腿骨と左腓骨は長軸を東西方向に、右上腕骨・左尺骨・左大腿骨・左脛骨・右脛骨は長軸をほぼ北東－南西方向にそろえ、折り重なった状態で出土している。これらの西側からは、左右橈骨・左上腕骨が、長軸を北西－南東方向にそろえて出土し、その下からは右寛骨片が出土している。また、棺内南側からは、左鎖骨・肋骨・左寛骨片が出土している。棺内東端からは、肋骨・脛骨・右肩甲骨が出土している。以上の人骨の位置関係は、軟部組織の腐朽に伴う人骨の移動によるものとは考え難い。加えて、遺存状況が比較的良好であるにもかかわらず下顎骨以外の頭蓋骨が出土していないことから、改葬時に人骨が動かされた可能性がある。

なお、棺内よりプラスチック製の櫛とビー玉が、棺外墓壙内より土師皿 1 点が出土している。

【18 号墓】

方形の墓壙内に埋置された肥前製陶器の甕棺内より、人骨が出土している。右大腿骨が、長軸を北西－南東方向にして出土し、その下より右腓骨が出土している。この西側からは左寛骨片が出土しており、その下より左脛骨と左腓骨が長軸を南北方向にそろえて出土している。左脛骨は、近位が北を向いている。棺内西側では、右大腿骨の下から左上腕骨が遠位を北東に向けて、左橈骨が近位を東に向けて出土している。これらの東側から、右尺骨が出土し、その下から下顎骨が裏面を上にして出土している。下顎骨の下からは、右肩甲骨が出土している。以上のような人骨の位置関係は、軟部組織の腐朽に伴う人骨の移動によるものとは考え難い。遺存状況が比較的良好であるにもかかわらず頭蓋骨が出土していないことから、改葬時に人骨が動かされた可能性がある。

【1 号溝】

南北方向に延びる溝である。2回掘りなおしが行われたうちの、2回目の掘り込みの層より、火葬骨片が出土している。

人骨所見

2 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、部位同定困難な骨片のみが遺存している。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り、硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

3 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、右下顎体と、部位同定困難な骨片のみが遺存している。歯式は以下の通りである。

／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	○	×	×	○	×

（○歯槽開放　×歯槽閉鎖　／欠損　△歯根のみ　・遊離歯　以下同様）

【性別と年齢】性別は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、左下顎骨臼歯部の歯槽が複数の歯で閉鎖していることから、熟年以上と推定される。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り、硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

4 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、部位同定困難な骨片のみが遺存している。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り、硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

5 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、後頭骨外後頭隆起付近と、部位同定困難な骨片のみが遺存している。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

6 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、左右不明の大腿骨体片と、部位同定困難な骨片のみが遺存している。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り、硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

7 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くない。頭蓋骨は後頭骨の外後頭隆起付近と、側頭骨の内耳孔付近、部位同定困難な骨片が遺存している。歯牙は、単根で歯種不明の永久歯 2 個が遺存している。躯幹骨は、環椎片、椎骨片数個が遺存している。上肢骨は右橈骨片が遺存している。この他にも、部位同定困難な長骨片が多数遺存している。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り、硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

9 号人骨

【保存状態】遺存状態はやや良好である。頭蓋骨は認められない。躯幹骨は、頸椎 6 個・胸椎 8 個が遺存する。上肢骨は、右肩甲骨・右鎖骨・左右橈骨・左右尺骨・右舟状骨・右月状骨・右大菱形骨・右有頭骨・左中手骨 5 個・右中手骨 3 個・基節骨 3 個・中節骨 5 個・末節骨 3 個が遺存する。下肢骨は、左寛骨・左右膝蓋骨・左右舟状骨・左右中間楔状骨・左中足骨 3 個・右中足骨 4 個・基節骨 3 個が遺存する。

【性別と年齢】性別は、通常判定に用いる部分が遺存しないが、腸骨翼がやや厚く尺骨の大きさも大きいことから、男性の可能性がある。年齢は、胸椎にリッピングが認められることから、熟年以上の可能性がある。

【特記事項】右鎖骨に骨折治癒痕がみられる。骨折個所は外側より 1/3 の位置で、近位骨片は胸鎖乳突筋の牽引によって上方やや後方に向かい、全体が大小胸筋の緊張によって短縮した状態で変形癒合している。以上の骨片転位は定型的な鎖骨骨折にみられるものである（天児編，1940）。

【形質】9 号人骨の計測可能な部位は上肢の前腕の断面径のみであった。橈骨は横径と矢状径ともに比較集団の平均値より小さい傾向が確認できる。尺骨についても同様で、各径は比較集団の平均値より小さい。そのため、9 号人骨の前腕は同時代の集団の中でやや華奢であると言える。

11 号人骨

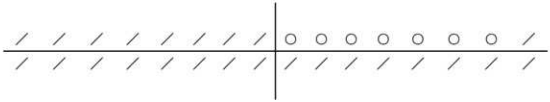
【保存状態】遺存状態はやや良好である。頭蓋骨は、部位不明の骨片が遺存する。歯牙は、小臼歯が 1 個遺存する。躯幹骨は、肋骨片・椎骨片が遺存している。上肢骨は、左肩甲骨片・左右上腕骨骨幹部・左右尺骨骨幹部・左右不明の橈骨片が遺存している。下肢骨は、右腸骨・左大腿骨遠位端・左右不明の膝蓋骨・右脛骨骨幹部・左脛骨骨幹部・左腓骨片・左右不明の中足骨が 1 個遺存している。他に部位不明の骨片が遺存する。

【性別・年齢】年齢は、全体的に骨のサイズが小さく、長管骨の骨端および寛骨が癒合していないが、歯牙は小臼歯の歯根が完成していることから、若年である可能性が高い。性別は、判定可能な年齢に達していないため不明である。

【特記事項】頭蓋骨片・歯牙・橈骨片と、一部の部位不明の骨片は、クラックがみられ硬質で変色しており、火を受けていると考えられる。火を充分に受けた人骨とそうでない人骨に部位の重複はなく、充分に火を受けていない人骨にも硬質に変質した部分がみられることから、本人骨は火葬されたが充分に火が回らなかった可能性がある。

15-a 号人骨

【保存状態】遺存状況はあまり良くない。頭蓋骨は、左上顎骨片・後頭骨片と、部位同定困難な骨片が遺存する。部位同定困難な縫合を含む骨片が遺存するが、内板が閉鎖している。歯式は以下の通りである。



躯幹骨は、椎骨片と肋骨片が遺存する。上肢骨は、左右肩甲骨片・左上腕骨片・左右尺骨片が遺存する。下肢骨は、右橈骨片・左脛骨片・左腓骨片が遺存する。このほかに、部位同定困難な骨片が多数遺存する。

【性別と年齢】性別は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、残存する頭蓋骨の縫合の内板が閉鎖していることから、熟年以上である可能性が考えられる。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り、硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

15-b 号人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、左右不明の大腿骨体の一部と、右尺骨の尺骨粗面から尺骨体近位側の一部、部位同定の困難な骨片のみが遺存する。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

16 号人骨

【保存状態】遺存状態は良好である。躯幹骨は、頭椎 5 個・胸椎 9 個・腰椎 5 個・左右肋骨 20 本・胸骨が遺存している。上肢骨は、左右鎖骨・左右肩甲骨・左右上腕骨・左右橈骨・左尺骨・右第 1 末節骨・左右不明末節骨・右第 2 ～ 4 基節骨・左第 1・3・4 基節骨、左月状骨が遺存している。下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・左右頸骨・左右腓骨・左第 1・3 中足骨が遺存している。

【性別と年齢】性別は、寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角が小さいことから、男性と推定される。年齢は、腸骨耳状面の状態（Lovejoy，1985）より、熟年と判定される。

【形質】頭蓋を除く部位の残存は良好であったため、四肢骨のほぼすべての項目を計測できた。

上腕骨については、長さが比較集団の平均値よりやや短いものの、その差はわずかである。その断面径は最大径と最小径ともに比較集団の平均値より小さく、断面示数を見ても扁平傾向は確認できない。橈骨については左側の最大長が計測できなかったものの、機能長の計測値は他集団よりも大きい。その断面径は、横径が比較集団の平均値より小さく、発達した傾向は見られない。尺骨についても、長さのうち計測できたのは機能長のみで、比較集団の平均値より大きい。尺骨の断面径は、矢状径は比較集団の平均値と差は無いものの、横径についてはやや小さい。上肢骨の形態的特徴をまとめると、他の近世集団と比べて長さは大きいものの、断面径はやや小さいため、概して細長い傾向が確認できる。

大腿骨については、長さは近世稲荷谷集団と現代九州集団より大きいものの、他の近世集団より小さい。その断面径は最大径と最小径ともに比較集団より小さく、断面示数を見ても柱状性は見られない。このような傾向は長厚示数に明確に表れており、やや細長い傾向が確認できる。脛骨については、長さは比較

集団の中で近世天福寺集団に次ぐ大きさである。その断面径については最大径と最少径ともに比較集団より小さく、断面示数を見ても断面の扁平性は見られない。以上のように、脛骨についても大腿骨と同様にやや細長い傾向が確認できる。腓骨については、長さは比較集団の中でも近世天福寺集団と近世蔀田青木集団につぐ大きさである。断面径については、他の下肢骨と同様に比較集団よりも小さい。下肢骨の形態的特徴をまとめると、上肢骨と同様に概して細長い傾向が確認できる。

Pearson の推定式を用いて、大腿骨左側の最大長の計測値から身長を推定した。その結果、推定身長は 159.0cm で、現代九州人よりも大きいものの、他の近世人集団と比較するとほぼ平均的な値である。

17 号人骨

【保存状態】頭蓋骨は、下顎骨のみが遺存する。躯幹骨は、胸椎 2 個・左肋骨片 5 個・右肋骨片 3 個が遺存する。四肢骨は、左鎖骨・左右上腕骨・左右橈骨・左尺骨・左右寛骨片・左右大腿骨・左右脛骨・左腓骨が遺存する。歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

【性別と年齢】性別は、大坐骨切痕が広く、腸骨前耳状溝がやや発達していることから、女性と推定される。年齢は、下顎の歯槽が全て閉鎖しており、耳状面に加骨形成が認められることから、老年と推定される。

【形質】17 号人骨については、上肢の断面径の計測が可能であった。上腕骨については、現代九州人よりも大きく、近世の比較集団の中でも頑丈な蔀田青木集団や天福寺集団の平均値に近い。橈骨については、横径と矢状径とも比較集団の中で同程度か小さい。尺骨については、矢状径は他の集団よりもやや小さいものの、横径については大きいため、断面がやや扁平である。

以上をまとめると、他の近世人集団と比べて尺骨はやや発達しているものの、その上腕骨や橈骨には大きな違いは確認できない。

【特記事項】左大腿骨の遠位は肥厚し、局所的な骨増殖・変性がみられ、骨膜炎の症状があったと考えられる。また、左脛骨も骨膜炎を発症していたと考えられる。また、左右上腕骨の遠位関節に、加齢による変性と考えられるリッピングがみられる。

18 号人骨

【保存状態】頭蓋骨は、下顎骨のみが遺存する。残存歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	I^1	/	/	/	/	/	/	/
○	M_2	×	P_2	P_1	C	○	○	○	○	C	P_1	P_2	M_1	M_2	○

躯幹骨は、頭椎 4 個・左右第 1 肋骨・左肋骨 7 本・右肋骨 3 本が遺存する。上肢骨は、左右鎖骨・左右上腕骨・左橈骨・左右尺骨・左月状骨・右第 1 中手骨・右第 2 中手骨・左第 3 中手骨・左第 4 中手骨・左基節骨 1 本・右基節骨 2 本が遺存する。下肢骨は、左寛骨・右大腿骨・左右膝蓋骨・左脛骨・左右腓骨が遺存する。

【性別と年齢】性別は、大腿骨粗線と脛骨ヒラメ筋線があまり発達しておらず、四肢骨が細く下顎が小さいことから、女性と推定される。年齢は、下顎第 1 大臼歯に歯槽閉鎖がみられるが、歯牙の咬耗度が栃原(1957) の 1° a ～ b で、関節のリッピングなどもみられないことから、成年の可能性が高い。

【形質】18 号人骨については、上肢と下肢の一部が計測可能であった。上腕骨については、左側は最小周のみで近世原田集団や現代九州集団の平均値に近い。残存状態の良かった右側を参考として見ると、中央最大径と最小径は比較集団の平均値と差はないものの、周径は大きい。橈骨については、横径は比較集団と大きな違いはないが、矢状径がやや小さいため、やや扁平性が強い。尺骨については、矢状径が比較集団の中ではやや小さい。大腿骨については左側の計測値が得られなかったため、参考として右側の計測値を検討する。中央矢状径は他集団と比較すると小さく、中央横径は大きな違いは無い。中央周については近世天福寺集団の平均値に近い。脛骨についても大腿骨と同様で左側の計測値が得られなかったため、参考として右側の計測値を検討する。骨体の矢状径と横径、周径を見ると近世の比較集団の平均値よりもやや大きい値を示す項目が多い。

以上のように、他の近世集団と比較すると四肢骨の各断面径に大きな違いはなく、顕著な頑丈性は確認できなかった。

【特記事項】犬歯に若干のエナメル質減形成が見られる。また、左下顎第 2 大臼歯の遠心側に齲蝕が見られる。

1 号溝　人骨

【保存状態】遺存状態はあまり良くなく、後頭骨外後頭隆起付近と、部位同定困難な骨片のみが遺存している。

【性別と年齢】性別・年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

【特記事項】全ての骨片はクラックが入り硬質で変色しており、本人骨は火葬された可能性が高い。

おわりに

人骨の出土状況および人骨そのものから得られた福童町遺跡9の埋葬習俗・形質的特徴は以下の通りである。

・埋葬姿勢を復元できる個体は少なく、座葬の可能性があるものがあるが、多くの個体で改葬を受けていると考えられる。また、火葬された個体もある。

・四肢骨は、個体数が少ないものの、他の近世人集団と比較して大きな違いは見られない。

・推定身長は、男性の 16 号人骨のみ算出可能であり、他の近世人集団の中で平均的な値である。

謝辞

本報告にあたり、小郡市教育委員会の西江幸子氏には様々なご教示をいただいた。深謝したい。

≪参考文献≫

天児民和（1940）神中整形外科学 各論，南山堂.

岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之（2004）稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨. 国道 502 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，竹田市教育委員会.

九州大学医学部解剖学第二講座編（1988）日本民族・文化の生成 2. 九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成. 六興出版.

鈴木尚（1963）日本人の骨，岩波新書 477，東京.

専頭時義（1957）現代九州人上腕骨の人類学的研究. 人類学研究，4.

鑄鍋博（1955）九州人下腿骨の研究. 人類学研究，2.

栃原博（1957）日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌，31.

中橋孝博（1987）福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨. 人類学雑誌，95.

中橋孝博（1993）福岡市席田青木遺跡出土の弥生、近世人骨. 席田青木遺跡，福岡市教育委員会.

中橋孝博・土肥直美（2008）原田第 1. 2・40・41 号墓地出土の近世人骨. 原田第 1・2・40・41 号墓地，下巻，筑紫野市教育委員会.

馬場悠男（1991）人体計測法 II 人骨計測法. 人類学講座別巻 1，雄山閣出版.

Martin-Saller（1957）Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.

Lovejoy,C.Owen, R.S.Meindl, R.Mensforth, and T.J.Barton (1985) Multifactorial Determination of Skeltal age at Death. American journal of Physical Anthropology, 68.

表 1　上肢の計測値の比較（男性）（単位 =mm）

	福豊町				稲荷谷		天福寺		原田		席田青木		九州	
	9号		16号		（近世）		（近世）		（近世）		（近世）		（現代）	
Martin	R	L	R	L	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨														
1 最大長	-	-	300	291	6	293.2	19	296.9	15	294.4	18	296.6	106	295.3
2 全長	-	-	298	290	8	287.0	15	293.3	15	290.3	16	292.6	106	290.6
5 中央最大径	-	-	22	21	6	22.7	20	22.9	22	22.8	30	24.1	106	21.9
6 中央最小径	-	-	17	17	6	18.5	20	17.7	22	17.8	30	18.6	106	16.9
7 骨体最小周	-	-	63	62	16	62.3	21	63.8	28	63.5	28	67.1	106	61.8
7a 中央周	-	-	65	63	6	64.5	20	66.5	22	67.8	30	70	106	63.7
6/5 骨体断面示数	-	-	77.3	81.0	6	81.8	20	77.6	22	78.4	3	77.3	106	79.1
7/1 長厚示数	-	-	21.0	21.3		21.1	17	21.3	15	21.4	17	22.6	106	20.9
橈骨														
1 最大長	-	-	227	-	5	219.6	12	228.5	14	225.8	19	231.4	64	219.9
2 機能長	-	-	216	215	7	207.7	11	212.2	17	211.8	14	215.9	64	208.2
3 最小周	-	-	44	45	12	39.8	16	42.2	30	43.6	26	44.9	63	40.1
4 骨体横径	15	15	15	14	14	17.5	16	17.5	32	17.1	27	18.3	63	16.0
4a 骨体中央横径	-	-	14	14	5	15.2	14	17.5	18	15.8	22	16.9	63	15.2
5 骨体矢状径	11	10	13	12	14	12.2	16	12.6	32	12.2	27	13.2	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	-	-	12	12	5	12.2	14	12.6	18	12.4	22	13.3	63	11.9
3/2 長厚示数	-	-	20.4	20.9	6	18.9	11	19.8	16	20.5	14	20.4	61	20.4
5/4 骨体断面示数	73.3	66.7	86.7	85.7	14	70.0	14	80.3	32	71.7	27	72.6	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	-	-	85.7	85.7	5	80.3	14	80.3	18	79.1	22	78.8	40	77.9
尺骨														
1 最大長	-	-	-	-	6	236.2	11	244.6	10	247.8	15	249.8	62	236.2
2 機能長	-	-	-	219	11	206.8	11	214.6	14	216.7	13	222.6	64	209.2
3 最小周	-	35	-	36	12	34.8	12	37.5	24	40.9	18	40.4	65	35.8
11 矢状径	-	12	-	13	17	13.1	17	13.1	38	12.8	30	13.6	63	12.8
12 横径	-	14	-	15	17	16.4	17	17.0	37	17.0	30	17.6	64	16.5
3/2 長厚示数	-	-	-	16.4	11	16.8	11	17.5	14	18.7	12	18.3	63	17.0
11/12 骨体断面示数	-	85.7	-	86.7	17	80.2	17	77.9	37	75.5	30	77.7	63	74.9

表 2　上肢の計測値の比較（女性）（単位 =mm）

	福豊町				稲荷谷		天福寺		原田		席田青木		九州	
	17号		18号		（近世）		（近世）		（近世）		（近世）		（現代）	
Martin	R	L	R	L	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨														
1 最大長	-	-	-	-	4	268.5	19	273.7	8	260.4	7	284.9	36	271.7
2 全長	-	-	-	-	5	264.8	15	271.4	5	258.6	5	281	36	268.6
5 中央最大径	21	20	19	-	5	19.0	20	20.3	10	19.0	17	21.6	36	19.8
6 中央最小径	16	16	15	-	5	15.2	20	15.5	10	14.8	17	16.2	36	14.8
7 骨体最小周	56	55	54	53	11	51.4	21	56.0	14	52.9	17	59.1	36	54.8
7a 中央周	65	64	56	-	4	52.5	20	59.3	10	56.3	17	62.1	36	56.9
6/5 骨体断面示数	76.2	80.0	78.9	-	5	80.1	20	75.9	10	78.0	17	75.2	36	75.3
7/1 長厚示数	-	-	-	-	4	18.8	17	20.7	7	20.2	17	20.8	36	20.2
橈骨														
1 最大長	-	-	-	-	5	196.2	12	197.9	10	196.4	6	206.2	12	199.9
2 機能長	-	-	-	-	6	185.2	11	183.5	12	185.2	6	192.8	12	187
3 最小周	35	33	-	33	10	33.4	16	35.7	16	37.8	11	40.2	12	34.7
4 骨体横径	14	13	-	15	12	15.1	16	15.3	18	14.4	15	16.2	12	14.5
4a 骨体中央横径	13	13	-	13	5	13.8	14	14.0	9	13.6	8	15.8	12	13.5
5 骨体矢状径	10	10	-	9	12	10.1	16	10.3	18	9.8	15	11.5	12	9.7
5a 骨体中央矢状径	10	10	-	9	5	10.2	14	10.2	9	10.0	8	11.6	12	9.7
3/2 長厚示数	-	-	-	-	5	18.4	11	19.4	9	20.0	5	20.8	11	18.1
5/4 骨体断面示数	71.4	76.9	-	60.0	12	67.2	15	67.4	18	68.8	15	71.8	10	68.3
5a/4a 中央断面示数	76.9	76.9	-	69.2	5	74.6	14	73.2	9	73.9	8	73.9	13	73.9
尺骨														
1 最大長	-	-	-	-	2	212.0	11	211.1	9	215.1	4	223.7	12	215
2 機能長	-	-	-	-	4	188.3	11	184.3	12	191.5	3	195.7	12	189.2
3 最小周	-	35	33	33	8	30.4	12	32.4	16	36.2	5	36.4	12	32.1
11 矢状径	-	10	10	10	13	10.8	17	11.2	18	11.1	17	11.9	12	10.9
12 横径	-	15	13	12	13	13.9	17	14.3	18	14.4	17	16.2	12	13.9
3/2 長厚示数	-	-	-	-	4	15.7	11	17.6	11	18.5	3	18.8	12	16.8
11/12 骨体断面示数	-	66.7	76.9	83.3	13	77.5	17	79.0	18	77.2	17	73.7	12	77.5

表 3 下肢の計測値の比較（男性）（単位 =mm）

	福重町 16号		稲荷谷（近世）		天福寺（近世）		原田（近世）		席田青木（近世）		九州（現代）	
Martin	R	L	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨												
1 最大長	410	413	9	407.4	20	415.2	19	420.5	31	419.6	59	406.5
2 自然位長	403	407	8	406.5	18	410	13	415.1	13	418.0	59	403.2
6 中央矢状径	23	24	20	28.4	17	27.7	36	28.3	40	28.1	59	26.5
7 中央横径	26	25	21	26.7	17	26.9	36	26.5	40	29.0	59	25.6
8 中央周	78	79	20	84.1	17	85.4	36	86.4	39	89.4	59	82.4
9 骨体上横径	31	30	20	30.6	14	30.4	39	31.7	38	33.8	59	29.4
10 骨体上矢状径	20	22	20	25.7	14	26.3	39	25.8	38	25.7	59	24.3
8/2 長厚示数	19.4	19.4	8	21.2	13	20.5	13	20.8	12	21.5	59	20.4
6/7 中央断面示数	88.5	96.0	20	106.7	17	104.1	36	107.4	40	97.0	59	103.8
10/9 上骨体断面示数	64.5	73.3	20	84.2	14	86.7	39	81.4	38	76.2	58	82.8
脛骨												
1 全長	332	334	10	330.4	13	339.5	19	331.7	21	330.3	61	320.3
1a 最大長	336	338	10	335.5	16	340.1	19	338.4	24	337.0	60	326.9
8 中央最大径	26	26	10	28.7	14	29.4	20	28.8	26	30.2	61	27.8
8a 栄養孔位最大径	30	31	16	34.0	15	33.7	35	33.3	34	34.4	60	30.6
9 中央横径	20	21	10	21.6	14	21.9	20	22.3	26	22.7	61	21.1
9a 栄養孔位横径	22	20	16	24.6	15	24.1	35	24.1	34	24.9	61	23.7
10 中央周	73	73	10	77.2	14	80.4	20	81	25	83.0	62	78.4
10a 栄養孔位周	83	85	14	88.6	15	91.3	35	90.7	32	93.0	61	88.9
10b 最小周	68	69	17	70.6	15	73.7	35	71.8	29	76.0	60	71.3
9/8 中央断面示数	76.9	73.1	10	75.6	14	74.8	20	77.8	26	75.4	61	76.1
9a/8a 栄養孔断面示数	73.3	67.7	16	72.4	15	71.9	35	72.8	34	72.3	60	77.5
10b/1 長厚示数	20.5	20.7	10	21.1	8	21.3	19	21.8	19	23.0	60	22.4
腓骨												
1 全長	333	333	7	332.0	12	335.3	10	327.6	6	333.0	58	322.9
2 中央最大径	15	12	6	15.3	13	14.3	17	14.6	24	15.2	59	14.5
3 中央最小径	10	10	6	11.0	13	10.8	17	10.9	24	11.2	59	10
4 中央周	42	38	6	41.2	13	40.5	17	42.7	24	43.7	59	41.5
4a 最小周	33	35	7	34.9	10	35.9	28	37.9	14	38.0	59	35.6
3/2 中央断面示数	66.7	83.3	6	72.3	13	75.5	17	75.2	24	74.2	59	69.5
4a/1 長厚示数	10.0	10.5	7	10.5	7	11.1	10	11.7	6	11.1	58	11.1

表 4 下肢の計測値の比較（女性）（単位 =mm）

	福重町 ST18		稲荷谷（近世）		天福寺（近世）		原田（近世）		席田青木（近世）		九州（現代）	
Martin	R	L	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨												
1 最大長	–	–	8	382.0	18	380.6	12	382.8	15	389.1	13	380.1
2 自然位長	–	–	8	376.9	16	376.7	8	378.8	5	388.4	13	375.9
6 中央矢状径	22	–	15	24.3	21	23.6	27	24.1	25	24.8	13	23.6
7 中央横径	24	–	15	24.5	21	24.0	27	24.3	25	26.6	13	23.2
8 中央周	75	–	16	74.6	21	75.2	27	75.7	23	80.5	13	74.2
9 骨体上横径	25	–	14	28.7	17	27.7	31	28.8	25	30.2	13	27.5
10 骨体上矢状径	21	–	14	21.6	17	22.7	31	22.4	25	23.0	13	21.3
8/2 長厚示数	–	–	8	19.3	15	19.8	7	20.6	3	21.2	13	19.8
6/7 中央断面示数	91.7	–	15	99.4	21	98.7	27	99.7	25	93.6	13	102.0
10/9 上骨体断面示数	84.0	–	14	75.4	17	82.3	31	78.0	25	77.0	13	77.1
脛骨												
1 全長	–	–	7	303.1	15	301.8	13	304.8	8	309.1	14	301.0
1a 最大長	–	–	7	307.6	15	305.6	18	306.4	10	314.0	14	306.6
8 中央最大径	28	–	7	25.3	17	24.4	15	24.5	10	26.1	14	24.7
8a 栄養孔位最大径	30	–	12	28.8	19	27.8	24	28.0	19	29.5	14	28.1
9 中央横径	18	–	7	17.9	17	18.6	16	19.0	10	20.1	14	18.8
9a 栄養孔位横径	20	–	12	20.0	19	20.7	23	20.7	19	21.6	14	21.1
10 中央周	73	–	7	66.7	17	67.5	15	69.5	9	72.2	14	70.1
10a 栄養孔位周	81	–	11	76.1	19	76.5	22	77.8	19	80.6	14	78.2
10b 最小周	65	–	13	60.4	17	62.7	24	62.3	15	66.1	14	63.6
9/8 中央断面示数	64.3	–	7	70.8	17	76.9	15	78.2	10	77.1	14	76.3
9a/8a 栄養孔断面示数	66.7	–	12	69.6	19	75.0	23	74.3	19	73.5	14	74.9
10b/1 長厚示数	–	–	7	19.9	14	21.2	11	20.4	6	21.4	14	21.2
腓骨												
1 全長	–	–	4	298.0	6	300.0	9	301.4	2	323.0	14	300.6
2 中央最大径	–	–	4	13.0	11	12.8	11	12.2	7	15.1	14	12.9
3 中央最小径	–	–	4	9.0	11	9.2	11	9.5	7	11.3	14	8.6
4 中央周	–	–	4	34.8	11	36.6	11	37.1	7	42.7	14	36.8
4a 最小周	–	–	5	29.4	8	32.9	15	33.9	5	34.2	14	32.3
3/2 中央断面示数	–	–	4	69.8	11	71.9	11	77.8	7	74.8	14	67.6
4a/1 長厚示数	–	–	4	10.1	5	11.0	8	11.0	2	11.0	10	10.8

表5 身長の比較（単位=cm）

		n	M
福富町	ST-16	1	159.0
稲荷谷	（近世）	12	158.2
天福寺	（近世）	24	159.4
原田	（近世）	30	160.1
鄙田青木	（近世）	30	160.3
西南日本	（現代）	37	157.7

11 号墓上肢骨

16 号墓上肢骨

11 号墓下肢骨

16 号墓下肢骨

17 号墓上肢骨

18 号墓上肢骨

17 号墓下肢骨

18 号墓下肢骨

9号右鎖骨骨折（上：16 号・下：9号）

9号右鎖骨骨折レントゲン写真

17 号左大腿骨骨膜炎

第６章　まとめ

１．福童町遺跡９の遺構の時期とその変遷について

１）溝の時期と旧地形について

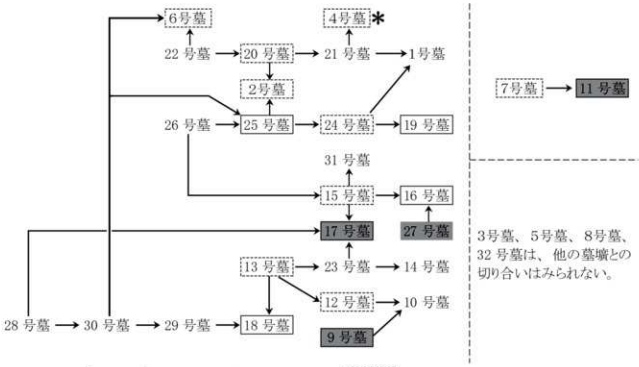
溝は4条確認し、全て南北方向の正方位に伸びている。1号溝は、弥生時代中期後半の遺構を壊して2回掘り直し使用した遺構である。五輪塔を含め出土遺物の多くは最後の埋没過程に伴うものであり、出土遺物より 15 世紀～ 16 世紀に埋まったと考えられる。2号溝は、時期は不明であるが五輪塔の破片が出土していることから1号溝に近い時期と想定される。3号溝は、染付の磁器皿が出土していることから 17 世紀～ 18 世紀と考えられる。4号溝は、現代の蔵骨器が出ており、墓域を切っていることから、現代のものと考えられる。遺構の性格としては、1号溝、2号溝、3号溝は、ほぼ同じ正方位にのっており、それが少なくとも 15 世紀以降から江戸時代まで続いていることから、墓域とそれ以外とを区画する溝としての役割が想定できる。

出土遺物で特筆すべきは五輪塔である。五輪塔は、1号溝、2号溝の他にも、4号墓から火輪と考えられる破片が、8号墓から水輪と考えられる破片が出土している。

旧地形としては、8号墓付近では当時の地山面を検出しており、周囲からは8号墓に伴うと考えられる墓壙の掘り込面に敷かれる多数の河原石や同じ層より水輪の破片が出土している。このことから、旧地形は、1号溝を検出した辺りから東側へ緩やかに下る地形をしていたと考えられる。

２）墓壙の時期とその変遷について

墓域は、調査区東端にて検出しており、32 基の墓壙を検出した。各墓壙の先後関係は以下のとおりである。（先行→後出）



＊　　は棺に肥前製甕を用いた墓壙。　　は棺に板を用いたと考えられる墓壙。

＊ ＊ は五輪塔の破片が出土した墓壙。8号墓からも出土している。

＊　　は副葬品が出土した墓壙。

棺は甕しか確認できておらず、副葬品もほとんどみあたらない。副葬品として断定できるものは、3号墓・9号墓・11 号墓・17 号墓・27 号墓から出土したもののみであり、その他の墓壙出土遺物は、埋土中で検出しており棺に伴うものではなかった。このうち年代がわかるものは、以下4基の墓壙である。9号墓からは、1銭硬貨と想定されるお金が出土している。1銭等の硬貨は明治4年以降に発行されていることから、9号墓は明治期以降の墓壙であることがわかる。11 号墓からは、昭和 12 年に開店した「デパート旭屋」が印字された札が出土していることより、昭和 12 年以降の墓壙であることがわかる。17 号墓からはビー玉等明治期以降と考えられる遺物が出土しており、27 号墓からも現代と想定できる器が出土している。

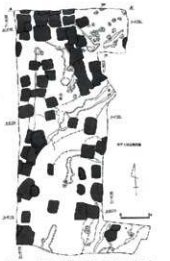
次に遺構から時代を特定してみたい。近隣では筑紫野市原田で『原田第1・2・40・41 号墓地』の大規模な近世墓地の発掘調査が行われている（筑紫野市報告 77 集）。この中で、肥前製の甕を使用した墓壙の出現は 19 世紀半ばから、正方形の墓壙は 18 世紀前半から確認されている。本調査地で検出した墓壙は、正方形を呈していることから、少なくとも 18 世紀前半以降に掘られたと想定できる。また、「西福童区有文書」のなかにある明治9年の『改正墓地一等限取調帳』や明治 24 年に土地台帳と照合して確認がなされている『御井郡小郡村大字福童地』の地籍図によれば、明治 24 年には少なくとも本調査地が既に墓地であったことがうかがえる。

以上より、出土遺物でも遺構の変遷でもはっきり年代を断定できないが、18 世紀前半以降に墓地として使用が開始された墓城であると想定でき、副葬品より主体は明治期以降であると考えられる。

2．小郡市域における近現代墓の傾向

これまで小郡市域内では、近現代墓の分布調査を『横隈十三塚遺跡2』（市報告 153 集）や『三沢北中尾遺跡5地点』（市報告 204 集）で行ってきたが、発掘調査には着手してこなかった。しかし、分布調査の過程で、近現代墓の傾向がうかがえる。

横隈十三塚遺跡2では、大正～昭和初期を主体とする 40 基程度の墓壙が確認されており、横隈区の共同墓地と考えられている。検出した墓壙のほとんどが1辺 1 m 程度の正方形を呈しており、墓壙の平面タイプは、福童町遺跡9で確認したものと類似している。また、三沢北中尾遺跡5a・5c 地点では、江戸時代の享保年間から 200 年以上にわたって使用されたと考えられる 300 基程度の墓壙が確認されている。墓石もいくらかは残っており、時代の確証を持つことができる。検出した墓壙において、埋葬のタイプは大きく分けて2通り確認されている。1つは、大型の甕に入れて土葬するものであり、1辺が1m 位の墓壙が該当する。この様相は、福童町遺跡9でも同様であった。もう1つは、火葬人骨を蔵骨器に収めて埋葬するものであり、小型の区画が該当する。三沢北中尾遺跡5a 地点で出土した蔵骨器は、福童町遺跡9の1号土坑より出土したものと類似している。



第 17 図　横隈十三塚遺跡
（S＝1／ 400）

第 18 図　三沢北中尾遺跡
5地点（S＝1／ 800）

以上、2遺跡の近現代墓の傾向と福童町遺跡9の墓を比較することをとおし、以下2点のことがわかった。

①蔵骨器として使用される土器の形態（本報告書第 13 図 12）。

②小郡市域において江戸時代以降昭和初期まで、墓壙の平面プランは正方形を呈し、大型甕を用いる墓壙の規格は1辺が約1mであること。

今後、近現代墓の発掘を行うに際し、上記のような傾向が確認されることが想定される。小郡市域内においては、近現代墓の調査はいまだ断片的なものであり、今後の調査成果の蓄積を期したい。今回の成果を含め、調査結果が蓄積していくことで、近現代墓の解明につなげていくことが必要であろう。

福童町遺跡9　出土遺物観察表

＜出土土器＞

器種＝弥:弥生土器土:土師器、青:青磁、白:白磁、瓦:瓦質土器、磁:磁器、陶:陶器

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	法量cm（復元値）				色調	胎土	焼成	成形・調整技法	残存率	備考
				口径	底径	器高	その他						
1		1号溝	土、皿	(12.0)	(8.6)	1.75		内外:橙(7.5YR6/6)	微砂をやや多く含む	良好	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	口～底約1/3	底部は糸切り。
2		1号溝	土、皿	(9.0)	(5.7)	1.75		外:浅黄橙(10YR8/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口～底約1/3	底部はマメツのため不明。
3		2号溝	土、皿	(8.8)	(5.8)	1.7		内外:浅黄(2.5Y8/3)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口～底約1/3	底部は糸切り。
4		3号溝	土、坏	(11.8)		2.85		外:淡橙(5YR8/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	微砂を多く含む	良好	外:ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口～胴下約1/5	
5	8	4号溝	土、坏	11.25	6.0	3.2		外:にぶい橙(7.5YR6/4) 内:橙(5YR6/8)	微砂を少し含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	完形	底部は糸切り。
6	8	5号溝	土、坏	11.0	5.9	3.05		外:にぶい黄橙(10YR6/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	完形	底部は糸切り。
7	8	6号溝	土、鍋			3.9		外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:灰褐(7.5YR6/2)	微砂をやや多く含む	良好	外:ヨコナデ、指押さえ 内:横方向ハケメ	口～胴上小片	外面にコゲあり。
8	8	7号溝	土、鍋			4.4		外:浅黄橙(10YR8/3) 内:褐灰(N3/)	微砂をやや多く含む	良好	外:ヨコナデ 内:指押さえ、ヨコナデ	口～胴上小片	内外面にコゲあり。
9	8	8号溝	瓦、鍋			5.3		外:黄灰(5B8/1) 内:黒(10YR2/1)	微砂を多く含む	良好	外:スス付着 内:横方向ハケメ	胴上小片	内外面ともにススあり。
10		9号溝	弥、壺			2.4		内外:浅黄橙(10YR8/3)	微砂をやや多く含む	良好	外:マメツ 内:マメツ	口～頸小片	
12	8	1号土坑	土、壺	21.3	20.4	25.7		外:にぶい橙(5YR7/4) 内:にぶい褐(7.5YR5/4)	微砂をやや多く含む	良好	外:横方向ヘラ削り 内:横方向ハケメ	口～底約1/1	4号溝出土遺物と接合
13		1号土坑	陶、壺	(9.0)		3.8		外:浅黄(7.5Y7/3) 内:灰(10Y6/1)	微砂を多く含む	良好	外:釉薬 内:回転ヨコナデ	口～胴上約1/3	
14	8	1号墓	土、皿		(4.7)	0.9		外:灰白(10YR8/2) 内:浅黄橙(10YR8/3)	微砂をやや多く含む	良好	外:マメツ 内:マメツ	胴下約1/10 底約1/1	底部は糸切り。
15	8	1号墓	陶、碗	(9.1)	(4.0)	2.1		外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:灰オリーブ(7.5Y5/2)	微砂を多く含む	良好	外:釉薬、回転ヘラ削り 内:釉薬	口～底約1/4	
18	8	6号墓	磁、碗	(12.2)	(6.4)	3.7		内外:オリーブ灰(10Y5/2)	微砂を少し含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口～底約1/4	
19	8	6号墓	土、壺	(16.6)		4.0		外:灰(5Y5/1) 内:黄灰(2.5Y5/1)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ、ヘラ削り	口～胴上約1/4	口縁部外面にススあり。
21	8	9号墓	陶、壺	55.0	30.0	78.0		外:暗赤灰(10R3/1) 内:赤灰(10R5/1)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、回転ヨコナデ	完形	内外面に鉄釉あり。 外面頸部に沈線2条あり。
23	8	11号墓	陶、壺	21.6	24.9	64.3		外:褐灰(5YR4/1) 内:赤灰(2.5YR5/1)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、回転ナデ	完形	口縁部内面に蓋の接合痕あり。 内面に鉄釉あり。 外面頸部に沈線3条あり。
24	8	15号墓	陶、壺	18.0		3.9	頂:5.8	外:にぶい橙(5YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	微砂をやや多く含む	良好	外:釉薬、ヘラ削り 内:回転ヨコナデ	口～頂約1/3	
25	8	15号墓	土、蓋骨	15.4	12.6	18.2		外:浅黄橙(7.5YR8/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口～胴約1/2 底約1/1	24とセット。
26	9	16号墓	陶、壺	24.2		19.8		外:暗赤褐(2.5YR3/2) 内:褐灰(5YR4/1)	微砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、回転ヨコナデ	口～胴上約1/6	内面に鉄釉あり。 外面頸部に沈線3条あり。
27	9	16号墓	陶、壺	53.2	26.8	83.6		外:暗赤褐(2.5YR3/2) 内:暗赤灰(10R4/1)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、回転ヨコナデ	完形	口縁部内面に蓋の接合痕あり。 内外面に鉄釉あり。 外面頸部に沈線3条あり。
28	9	17号墓	土、皿	(7.2)	(4.6)	1.45		内外:浅黄橙(7.5YR8/3)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口～底約1/1	底部は糸切り。
31	9	17号墓	陶、壺	57.2	14.2	81.7		外:赤灰(7.5R5/1) 内:赤灰(7.5R4/1)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:回転ナデ	完形	外面頸部に円形浮文あり。 外面頸部に沈線2条あり。
32	9	18号墓	陶、壺	53.7	27.6	81.5		外:極暗赤褐(7.5R2/2) 内:赤灰(10R5/1)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:釉薬、回転ヨコナデ	完形	内外面ともに鉄釉あり。 外面頸部に沈線2条あり。
33		19号墓	土、皿		(4.4)	1.8		外:浅黄橙(7.5YR8/3) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	微砂をやや多く含む	良好	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	胴下～底約1/4	底部は糸切り。
34		19号墓	青、碗	(14.1)		3.4		内外:明緑灰(7.5GY8/1)	微砂をやや多く含む	良好	外:釉薬 内:釉薬	口～胴上約1/8	
35		19号墓	土、鍋			3.3		外:橙(5YR6/8) 内:橙(2.5YR7/6)	微砂をやや多く含む	良好	外:ヨコナデ、指押さえ 内:横方向ハケメ	口～胴上小片	
36	9	19号墓	陶、壺	49.4	26.8	85.4		外:極暗赤褐(7.5R2/2) 内:暗赤褐(7.5R3/2)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬、釉削り 内:釉薬	完形	内外面に鉄釉あり。 外面頸部に沈線2条あり。
37	9	25号墓	陶、壺	50.2	26.0	79.4		外:極暗赤褐(7.5R2/2) 内:極暗赤褐(10R2/2)	細砂をやや多く含む	良好	外:釉薬、タタキ 外:釉薬、タタキ	完形	タタキは7本1単位。 外面頸部に沈線3条あり。
38	9	27号墓	陶、皿	12.6	5.2	3.5		外:暗灰黄(2.5Y4/2)+にぶい赤褐(5YR4/4) 内:黄灰(2.5Y5/1)	微砂を多く含む	良好	外:釉薬、回転ヘラ削り 内:釉薬、釉剥ぎ	完形	内面の文様は一筆描き。

＜石器・土製品・青銅製品＞

挿図番号	図版番号	出土遺構	器種	石材	計測値				備考
					長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	
11	8	1号溝	玉輪塔(空風輪)	凝灰岩質	17.8	13.2	13.3	—	
16		3号墓	貨幣	ほぼ完形	2.2	2.15	0.2	1.3	石製。緑泥片岩か。
17	8	3号墓	貨幣	ほぼ完形	2.2	2.2	0.3	1.5	石製。緑泥片岩か。
20	9	9号墓	貨幣	完形	2.4	2.4	0.1	3.8	銹のため、判読できず。
22	9	11号墓	札	完形	3.95	5	0.6	—	ゴム製。「デパート近屋」の建物の印字あり。
29	9	17号墓	ビー玉	ほぼ完形	1.5	1.7	0.75	—	
30	9	17号墓	櫛	ほぼ完形	0.7	16	0.35～0.1	—	プラスチック製。歯は全て欠けている。

①北西調査区全景（真上から）

②北東調査区全景（真上から）

図版2

①北東調査区墓域全景（真上から）

⑤1号溝・2号溝完掘全景（真上から）

②墓域西側全景（北側から）

⑥1号溝遺物出土状況（南側から）

③北西調査区北壁土層断面（東側から）

④1号溝土層断面（南側から）

⑦3号溝完掘全景（南側から）

①3号溝土層断面（南側から）

②4号溝土層断面（北側から）

③4号溝遺物出土状況（北側から）

④1号土坑遺物出土状況（南側から）

⑤1号墓完掘全景（南側から）

⑥2号墓完掘全景（南側から）

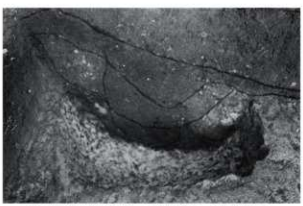
⑦3号墓完掘全景（西側から）

図版4

①4号墓土層断面（北側から）

③6号墓完掘全景（北側から）

②5号墓完掘全景（南側から）



⑤8号墓土層断面・完掘全景（西側から）

④7号墓掘り込み検出状況（北側から）

⑥9号墓甕検出状況（南側から）

⑦9号墓人骨出土状況（南側から）

① 10 号墓完掘全景（東側から）

④ 12 号墓完掘全景（北側から）

② 11 号墓甕検出状況（東側から）

⑤ 13 号墓完掘全景（西側から）

③ 11 号墓人骨出土状況（西側から）

⑥ 14 号墓完掘全景（北側から）

図版6

①15号墓完掘全景・16号墓甕検出状況(東側から)

④ 16 号墓人骨出土状況（東側から）

② 15 号墓人骨出土状況（北側から）

⑤ 17 号墓甕検出状況（北側から）

③ 16 号墓甕検出状況（西側から）

⑥ 17 号墓人骨出土状況（東側から）

① 18 号墓甕検出状況（南側から）

② 18 号墓人骨出土状況（南側から）

③ 19 号墓甕検出状況（北側から）

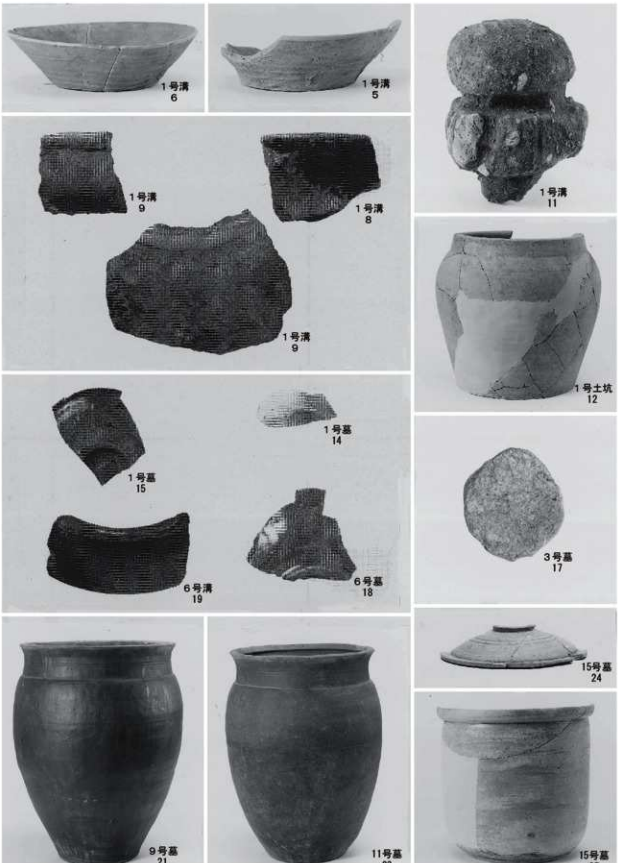
④ 25 号墓完掘全景（西側から）

⑤ 27 号墓完掘全景（東側から）

⑥ 29 号墓完掘全景（北側から）

⑦ 30 号墓完掘全景（北側から）

図版8



1号溝、1号土坑、1・3・6・9・11・15号墓 出土遺物

9号墓
20

11号墓
22

18号墓
32

17号墓
30

17号墓
29

17号墓
28

19号墓
36

16号墓
26

27号墓
38

16号墓
27

17号墓
31

25号墓
37

9・11・16・17・18・19・25・27号墓 出土遺物

	報　告　書　抄　録
ふりがな	ふくどうまちいせき９
書名	福童町遺跡９
副書名	福岡県小郡市福童所在遺跡の調査報告
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２６５集
編著者名	西江　幸子
編集機関	小郡市教育委員会
所在位置	〒838-0198　福岡県小郡市小郡255-1　℡ 0942-72-2111
発行年月日	平成24年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
福童町遺跡９（ふくどうまち いせき）	福岡県小郡市福童字町（ふくおかけん おごおりし ふくどう あざまち）	40216		33°22′53″	130°32′43″	2010.11.4～2010.12.28	112㎡	小郡・西福童3081・3086号線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福童町遺跡９	集落・墓地	中世 近世 近代	溝 土坑 墓壙 ピット	土師器 五輪塔 貨幣 ゴム製札 ビー玉 鏡 櫛	

福童町遺跡９は、小郡市を縦断する宝満川西岸の低台地縁辺部、標高12ｍ前後に立地する。北東調査区からは、明治期以降を中心とする墓域や墓域を区画するために使用されたと考えられる南北の正方位にのる溝が３条確認された。周辺では、近世の集落や畠跡が検出されていることから、近世以降この地に継続して人々が住んでいたと想定できよう。

福童町遺跡９

小郡市埋蔵文化財調査報告書第265集
平成24年 3月 31日
発行　小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡255-1
出版　片山印刷有限会社
福岡県小郡市祇園１丁目8-15